

十五年

つづやまの

病

九折空也

エッセイ I

作品の恐怖と手掛け方

エッセイ II

△の△のも△△の同一性

エッセイ III

風情がないのは才能がないからだ

短編小説

十五年つづやきの病

エッセイ IV

ボカロPと呼ばれる人たちはどんな音楽を聴いてきたのだろうか

エッセイ V

ABトンネル

エッセイ VI

性的野心

エッセイ VII

あなたのうらやましいことは何だろうか

エッセイ VIII

人はさびしいと自我に穴があく

エッセイ IX

鉄の板

エッセイ X

十五年つづやきの病の真相

# 作品の 恐怖と 手掛け方

うねうねくん。

やがて「書物」が問われる。

やがて問われるということは、けっきょくいまも問われているということだ。

書物でなくてもいい、作品はすべて書物として扱われる。

作品はどのように生じるだろうか。

どのようにしたら、作品を手掛けることができるだろうか。

何でもいからやってみろ、とすべての賢人は言うだろう。

そのとおり、何でもいからやってみるしかない。

そして、作品は、生じないのであった。

どんなに下根性を向けても、作品は生じないのだ。

努力の成果とか、汗と涙の結晶とか、そういう形では生じてくれない。

うねうねくん。

キャラとかノリとか、センスとか、そういうものでも生じてくれない。

ヤバイ。

そのヤバさは、入り込んだ者しかわからない。

作品が、「本当に生じない」ということ。

それが本当にヤバイ。

なぜそんなことがヤバイのかというと、そのヤバさはやはり、そこに入り込んだ者しかわからない。

なんというか、たとえるなら、就職面接を百社受けて、百社とも落ちたというときの感覚だ。

そんなことになったことはないけど、きつとそういう感覚だ。

百社受けて、百社落ちたとしたら、どうなるか。

それはもう、百一社めは、受ける前から「落ちる」とわかるということだ。

それがヤバイ。

しかもだ、前もって、面接の最中から「あつ、これはダメだな」とわかるのならまだいいのだ。

そうではなく、面接の最中はわりとふつうなのだ。

何であれば、途中まで、「感触はすごくよかった」「手ごたえあった」と感じている。

面接官もニコニコ、ほほえんでくれている。

にもかかわらず、百社連続で落ちる。

何がいけないというのだ、何が理由で落ちているんだ。

理由がわからない。

理由がわからない、というより、「そもそも落ちるもの」のような気がしてくる。

こうしたことは、他人事としては「へえ」と笑いごとで済むが、じつさいにそこに入り込んだ者にとっては恐怖だ。

パニックになり、恐怖に押しつぶされる。

このパニックと恐怖は何なのだろう。

それは、会社に入れない、ということの恐怖ではない。

面接で、どんな顔をして、どんな声を出し、どんな話をし、どんなアピールをすればいいのか、もはや一ミリもわからない、という恐怖だ。

キリッとした顔で面接室に入る。

「でもこれも違うんだろうな」

ニコニコした顔で面接室に入る。

「でもこれもダメなんだろうな」

朗々と、なるべく大きな声であいさつする。

「これってダメなやつ？ たぶんそうなんだろう」

ていねいなお辞儀をして、ていねいな話し方をする。

「たぶんこれで落ちるんだよね？」

もう、何をどうしたらいいのかわからない。

あ、別の例を思いついた。

あなたがおしゃれをして、デートに行った。すると相手から「ださい」と言われた。

それで落ち込んだが、奮起して、おしゃれ雑誌を読み込み、コーディネートをあたらしくした。

しかし、「よりださい」と笑われた。

やむをえず、おしゃれな友人に頼り、コーディネートを決めてもらった。

すると、舌打ちされて、「いままで一番ださい」と言われた。

しょうがなく、一般的なスーツ姿で行くことにした。

ため息をつかれて「違う」と言われた。

どうしたらいい？

もう何もかもわからない。

それであなたは、翌週、オーディションを受ける。

審査員は十人。

自分に似合う服を着てきて、十五分間、自己PRをしてください、と募集要項に書かれている。

どの服を着るべきか、どんなPRをするべきか。

一ミリもわからない。

「よし、これでいこう」

昨夜はそう思った。

でも今朝になって、

「違う、ぜったい違う」

という確信がある。

じゃあどうすればいい。

どうすればいいとやって、それが一ミリもわからないのだ。

またため息をつかれて、またださいと言われて、また「違う」と言われて、また落とされる。

審査員十人が、ジロジロ見てきて、首をかしげたり、隣に耳打ちしたりする。

につこり笑っても「何それ」、キリツとしても「何それ」。

もはや、面接とかオーディションとか、合格とか落選とか、そんなことはどうでもよくなっている。

そんなことより、とにかく「わからない」。

正解がわからない。

正解なんてない、ということはわかっているが、そんなことは屁理屈だ。

とにかくマジでわからないのだ。

友人に何か、笑い話をしてみる。

以前まで、そういう無駄話は得意だったのだけれど……

それが本当に、面白い話なのかどうかわからなくなってくる。

友人が悩んでいる話を聞いて、

「○○ちゃんなら、きつとできるよ」

と励ました。

それはわれながらまともな応答だったと思う。

けれど、帰宅してひとりになると、

「あれっ、わたし、何かヘンなことを言ったんじゃないか……」

自信がなくなってくる。

自信がなくなってくるか、あるいは、

「そもそも、自信なんて何一つなかったんじゃないか？」

いったい、何をもって、これが正しいとか、これがイケているとか、思っていたんだろう。

すべてはただの思い込みだったんじゃないか。

そうなる、何かゾツとしてきて、

「自分の何もかもが、間違っているような気がする」

こうなるともう、日常から、すべての挙動が引き攣（つ）ってくる。

なるべく、自分がへんな奴にならないように、当たり障りのないキャラを徹底して演じるけれども……

それでも、

「自分はやっぱりへんなんじゃないか」

じゃあどうすればいいか。

その、どうすればいいかが一ミリもわからないのだ。

いろんな本を読んだり、いろんなウェブサイトを漁れば、「こうすればいい」というような、便利そうに見える方法が書いてある。

その本やウェブサイトや、動画のタイトルやサムネイルには、惹きつけられて期待がワツと湧いてしまうのだが、すがったところでけっきょくのところ、そこで聞かされた話を自分でまっとうしようとする、

「いや、だから、そこがわからないんだって」

ということが出てくる。

なるべく言われたとおりに、書かれてあったとおりにしようと思うが、

結果、

「別に何も変わらないっていうか、これ、いつものわたしじゃん」

ダメじゃん、ということになる。

このとき、もう目つきがへんになっている。

内部で、思考が何か「ギリギリ」になっているのだ。

感情が意味不明に鳴動し、自分でもびっくりするぐらい、急に怒りだしたりする。

何に怒っているのか自分でも意味不明だ。

しかし怒りが大爆発している。

自分の声が、異様にわざとらしく、作り物のようで、「えっこれ、誰の声？」と自分でびっくりする。

何か決めゼリフみたいなことを言って、キメ顔をして、自分で「なにこれ」と思う。

あはははは！

えっ、何この笑い声。

ああ、もう、誰か助けて。

その助けを求める声も何かわざとらしくておかしい。

なんなんだこれは、脱出不能だ。

作品というのは、だいたいこんな感じになってしまう。

作品はヤバいのだ。

何がヤバいのかは、そこに入り込んだ人しかわからない。

何がヤバいといって（二回目の説明）、作品の良し悪しとかではなく、また作品が出来ないということでもなく、作品にかかわって徹底的に、

「わからない」

ということがヤバい。

自分を構築しているすべての感覚や認識が役に立たず、引き攣（つ）て、軋（きし）みはじめてしまう。

ああ、もう、繰り返しさえよいルーチンワークだけを仕事にして、それだけで生きていきたい、と思う。

ルーチンワークの業務は怖くない。

もうそれを数年間も続けていて、何をすればいいかわかっているし、やるべきことをやっていたら、怒られたり否定されたりすることもないから。

ルーチンワークの業務は怖くないのだ。

作品は怖い。

無限に、永遠に、否定されつづけ、最後の最後まで「わからない」かもしれない。

前進するということがない。

わからない森を前進して、わからない池にたどりつき、わからない池を前進したら、わからない草原に出た。

それを前進していくと、別のわからない森に入り込んだ。

こんなものを前進とは言わない。

ただの遭難者だ。

作品が生じるってどういうことよ。

手元にどんな地図があったとしても、

「いやだから、地図はわかったけれど、この地図のどこに、作品が生じる場所があるかって訊いてんの」

うねうねくん。

あるいはよろよろくん。

やがて書物が問われる。

あなたの書物はどれか。

書物以外の作品も、書物と扱われる。

作品ならすべて同じだ。

作品が「生じる」というのはまったくのナゾだ。

魂魄の空間で、魂魄が交わらないと、作品は生じない。

魂魄が交わると作品が生じるのであって、逆に言えば、作品を生じさせるための、センスとかアプローチとか、そういったものは必要ない。必要ないというより、そもそも存在しない。

塩酸と水酸化ナトリウムを反応させると、食塩が生じるが、そんなことにセンスとかアプローチとかは存在しない。

交われれば生じるというだけだ。

人が恣意的に何かをしているわけではないし、恣意的に何かをする必要はないし、恣意的に何かをすることじたいできない。

作品は、生じてからしか手掛けられない。

これは大事なことだ、知っておいて損はない。

作品は、手掛けてから生じるのではない。

生じてから手掛けるのだ。

生じてから手掛けるといっても、すでにそれは生じているのであって、手掛けるといっても、ほとんどクリエイティブな作業はない。

クリエイティブな作業なんて存在しねえんだよ。

クリエイションの事象を受けて、受けたままを現わすために、必要な身体性や伎倆というものはあるが、クリエイションの事象じたいを、人が手掛けることはできない。

うねうねくん、なんてアホみたいなことを言っているが、そこにおれの独特のセンスなんかがあるわけではない。

魂魄の空間、非観測の空間で、魂魄が交わり、そこに作品が生じる。

それが生じて「から」、わたしはうねうねくんと言っているのだ。

何も生じていないのに、勝手にうねうねくんと言っても何にもならない。

ただの、センスがあるふりをした、寒いものになるだけだ。

そんな寒いものを振り回すなら、わたしは人に媚びなくてはならなくなるだろう。

生じて「から」、手掛ける。

そうでないと「出来事」にならない。

出来事になっていないなら、何かが「出来る」「出来上がる」ということはありえない。

うねうねくん。

そしてわたしの書物が著わされる。

作品が生じる、それが「わたしの出来事」になっている。

わたしの出来事でなければわたしの作品であるわけがねえよ。

せいぜいヒントとしては、その「生じる」ということに敏感になり、「生じる」ことなしに、手掛けるということを勝手に始めない、ということぐらいだろうか。

これは、テキストに書いているが、爆裂ウルトラ大切なヒントだ。

ものすごく根底的なメソッドを公開してしまった。

無料だ、もってけ。

生じて「から」、手掛ける。

生じたものを手掛ける。

生じたものに従って手掛ける。

魂魄はどのようにすれば交わってくれるのだろうか？

それは、「みだりに」をやめれば交わってくれる。

樹木Aと樹木Bが並んでいて、それぞれの樹木の「うろ」には、リスが棲んでいる。

樹木Aにはオスのリスが、樹木Bにはメスのリスがいて、この二匹のリスは、どうしたら出会い、交わってくれるだろうか。

それは、簡単だ、その樹木の足許でやっている道路工事をさっさとやめればいい。

ドカンボタンバキギズコンと、樹木の足許で大騒動をやっているから、リスたちはうろから出てこないのだ。

樹木をユサユサするな、リスたちはますますうろから出てこない。

静かにしてやれば、ものの数分で、二匹のリスはそれぞれのうろからひよっこり出てくる。

交わるのは勝手に交わる。

いつものことだ。

われわれが「みだりに」、騒動を起こしているから出てこないのだ。

禅僧が壁に向かって座っているのは、あれは何をしているのか？

何をしているとって、何もしていない。見たらわかるだろう。何もしていない。何かをしているわけがない。

何をしているかという「坐（すわ）っている」のだ。それ以外のことをしてはいけない。

それ以外のことをするなら渋谷のクラブに行け。

まあ、じっさいには、わたしは坐禅に成功している人なんて見たことないけれどね。

（道元と、澤木興道禅師を除く。実物は見たことないけれど）

坐ってりゃ、魂魄が勝手に交わるということ。

それが坐禅というメソッドだ。

それで、三千世界でも観解するのかね、おれは知らん。やったことがないので知らん。

魂魄が交わるのは、ただの魂魄の性質であって、われわれの恣意ではない。

うねうね〜ん。

やがて書物が問われる。

念じるな、唱えるな。

そのみだりな騒動をやめろ。

その騒動のたびに、リスたちがびゅーっと「うろ」にあわてて逃げかえっているのがわからないか。

じっくり内部で観察したらわかるかもしれない。

あなたが内心で、思っ、念じて、唱えて、うごごごとやるので、その瞬間にびゅーっとリスたちは逃げ帰っているだろう。

エモるな。

エモるという動詞があるのかどうかは知らないが、エモるな。

「やがて書物が問われる」

そう言われると、わけもわかっていないくせに、まるで食いつくようにエモる。

そのエモリじたいが騒動になっているので、もとの味が消えるのだ。

やがて書物が問われるんだってば。

そういうことなら、取り掛かれるでしょ。

手掛けるのは、生じてからだ。

だから、うねうね〜んだ。

生じる前から手掛けてはいけない。これは巨大で最高のヒントだ。

やがて書物が問われる、じゃあ……うねうね〜んとなり、作品が生じた、さあ手掛けなさい。

さあ手掛けなさい、生じたものに従って手掛けなさい。

やがて書物が問われる。

このことに力があり、魂魄が交わる。

交わりと生じるものは、うねうね〜んという感じだ。

うねうね〜んに従うしかない。

「やがて書物が問われる」

「そういうことなら……」

このやりとりは暗記しておいてもよい。

やがて書物が問われるなら、書物（作品）に取り掛かりましょう、という、単純な文脈があるわけ。

あなたは社会人になったら名刺を持っただろう。また、いまはまだ学生

の人も、社会人になったらすぐ名刺を持つだろう。  
なぜか。

なぜかといって、そりゃ、

「やがて名刺が問われる」  
からだ。

取引先から「お名刺をいただけますか」と求められるので、名刺を刷り、名刺を持つようになるのだ。

誰からも求められないなら名刺なんて刷らない。

当たり前すぎることだ。

それと同じで、やがて書物が問われるから、書物（作品）を持つとうとするのだ。

騒動をやめたなら、いつのまにか自分は出来事の中に立っている。

「やがて書物が問われる」ということばを在（あ）らしめて、そのとき騒動さえしなければ、いつのまにか自分は出来事の中に立っている。

出来事の中というとか、出来事の面前というか。

その出来事は、うねうねくんとしていたり、によりくんとしていたり、うによりくんとしていたりする。

そこは何でもいいのだ。

必ず、魂魄が交わって何かが生じて「から」、それに従って作品を手掛けないさい。

「作品の恐怖と手掛け方」

△の△の△も△△

の

同一性

ああ、エッセイ。

こんなものはエッセイなのだ。

かつて、エッセイというのは、この世でいちばんダサイものだった。

それが、みんなに見捨てられ、ついに逆転して、何かここでは素敵なものになった。

おれだけかもしれないけれど……

こんなものはエッセイなのだ。

まじめな話なんかしていられるかよ。

エッセイとか私小説とか。

私小説はマジでダサイな。

しかし、それはシテイポップのようにダサイので、うまいことしたら、素敵な何かになるかもしれない。

これはもはや昭和でもないし平成でもないし令和でもない。

何か独自の元号の中をさまよっている。

エッセイの中で、いろんなことを教えられてしまうから、おれはスゴイのであって、また、エッセイの中で教われないなら、何も聞こえてこないから、けっきょく教われねえんだよ。

へボ教授が書く論文には、何のエッセイも聞こえてこないが、ほんまもの学者が書く論文には、エッセイが聞こえてくる。

それはもう、論文というか、直接の学門だよな。  
直接の学門が書いてある。

そういうのは、もう単なる学者という身分ではなく、その人自身に至っているのだ。

そういうのが聞きたいし、そういうのを教わりたいよなあ。

あなたは、作品うべこらぼえぬきりゃああえ、しまった、タイプミスした。

あなたは、「わたし」といって自分を指差せ。

言われたとおりにやってみろ。

あなたは自分の顔を指差しただろう。

顔を指差して、

「わたし」

と言った。

そしてたいてい、指差した先は顔面の中心線に近く、だいたい、顔面の真ん中寄りになることが多い。

目と鼻のあいだぐらいになることが多いかな。まあそのあたりは人による。

右手でやれば、顔の右側に寄るし、左手でやれば、顔の左側に寄りがちだ。

右手が顔の左側まで行くということはほぼない。

「わたし」

と指差す。

書物なんてもう、改行してあったらそれで書物だよな（この一行はまったく要らない）。

あなたが顔面のぼんやり中央を「わたし」と指差したのは、そこにあなたの「自意識」があるからだ。

「わたし」といって、自分の膝を指差す人はいないし、自分の手のひらを指差す人もいない。

指差すならだいたい顔だ。

あるいは、「わたし」ということなら、胸に手を当てて「わたし」という

こともある。

それは、「わたし」というところあたりが、やはり心臓周辺にあるからだろう。

そこにころがあり、ころあたりがある。

そうでなきゃ、古代人はそこにある臓器を心臓とは呼ばなかっただろう。

次にあなたは、へのへのもへじを描いてみる。

ボールペンで適当に描け。

知っている人は「へまむしょ入道」でもいい。

あなたはへのへのもへじを描いてみた。

そのへのへのもへじを描いたのは誰だ。

そりゃあなただ。

それはあなたの作品ということになる。

でも本当にそうかというところ、まさかそれを、「自分の作品です」といって

個展に示し、販売しようとする人はいない。

いないでもないのかな。ヘンな街のヘンな人たちは、そういうものをあ

りがたがって買う可能性もある。

ともあれ、そのへのへのもへじを描いたのはあなただ。

あなたは、そのへのへのもへじを描いて、それを指差し、「わたし」と言

ってみる。

ん？

指差したそれに、「わたし」という感じはしないだろう。

指差した先にあるのは、へのへのもへじという、よく知られた記号パターンだ。

描いたのは「わたし」だけだね。

指差したそれは「わたし」ではない。

ただの落書きだ。

これが問題だ。

あなたが入念に、画力をふりしぼり、キュビズムとリアリズムに満ち

た、キュウリとレンコンとハダカデバネズミの絵、それも三者が必死にな

ってラッパを吹いているという絵を描いたとする。

あんたはその絵を指差して「わたし」と言う。

それは「わたし」か？

いや、それを指差して「わたし」はおかしい。

それはキュウリとレンコンとハダカデバネズミだ。

描いたのは「わたし」だけだね。

これが問題だ。

へのへのもへじと同じなのだ。

画力の問題ではない。

モチーフは、半分は本質的な問題だが、そのモチーフが「わたし」でないのなら、けっきょくモチーフも問題ではなくなる。

自分で描いたのに、指差したそれが「わたし」と言えないのだ。

つまり、同一性がないということになる。

おれはここに、技術的に拙劣な文章を書きなぐっている。

だが、おれはこの文面を指差し、

「おれだ」

と言いうる。

おれの文章はおれと同一性を持っている。

これは「おれ」であり、だから、落書きではない「書物」になっている。

ここに、何かおれのイメージーションがあるのか。

ないな、見たらわかる、見たとおり、ないわ。

ではここに、おれの気持ち語られているか。

ないな、気持ちって、むしろ「この人どういう気持ちでこれを書いてるんだろう」と疑問にしか思わない。

ここに、パッションがあるのかというと、まあ何かしらのパッションはあるのかもしれない。

ここに、おれのホンネが出ているのかというと、どこをどう見ても、ここにこの書き手のホンネなんてものは見当たらない。

にもかかわらず、ここに書かれているのは直接「おれ」だ。

おれが書いているという事実だけでなく、これじたいが「おれ」ということがある。

同一性だ。

おれがあなたの目の前でへのへのもへじを描けば、その当たり前の営為の途中で、あなたは、

「あれっ……？」

とヘンな感じを覚えるだろう。

頭がぐわーんとする。

なぜかわからないが、イライラしてきたり、怒りだしたり、異様なキララになって何かを言い出したりする。

おれが絵を描くのを妨害しようとしたりする。

冗談でなく、物理的に、手を突っ込んできたりして、差し止めようとすることがある。

発作的にだ。

そんなことが本当にあるものだ。

それで、だいたいあとになって、

「わたしそんなことしましたっけ？」

と、マジのようなとぼけたような、びっくりの仕方をするのだけれど。

なぜかわからないが、自分の全身から、ナゾの悪いガスが出るのだ。

他人の同一性営為を阻害しようとする、広範囲に及ぶ悪いガスをまき散らす。

自分の意思ではその噴出を差し止められない。

(いや、本気になったらそりゃ止められるけれど)

頭がぐわーんとなって、そのとき何かに取り憑かれているから、本気でそれを止めようとは思わないものだ。

感情的にはなるけどね。

この人の営為には同一性がある、というだけ。

この人が手掛けることには同一性がある、というだけ。

ただそれだけが、大騒動になるのだ。

ことは、へのへのもへじの時点で現れている。

誰でもへのへのもへじは描けるし、絵が上手な人は、へのへのもへじだって何かしらアレンジして、かわいくきれいに、目立って印象的なものとして描くことができる。

アーティスティックに描いちゃって、その行程を、Youtubeのショート動画にアップロードする人もいるのだ。

が、問題は、それを指差したときだ。

それが上手であつても、それが「わたし」かどうかは別だ。

もちろんその絵が販売されるとして、その売上金は、描いたあなたのものだ。

その意味では、指差したそれは「わたし」のものだが、もしそれが売れなかったらどうする。

売れなかった場合は、「わたし」がなくなるのか。

「わたし」の存在は、認められなかったので、「わたし」はまだ存在していない気がする。

そう思っている人はけっこう多いのだろう。

そんなあなたのことは、広辞苑に載っている。

調べてみると、【あほ】という見出しのところに、あなたのことが書いてある。

【あほ】、あなたの同一性を他人に恃（たの）んでどうする。

絵が一万円で売れたとき、その一万円はあなたに与えられるだろう。だから、あなたと絵は同一性があるということになるのか。

それはただの所有権だ。

あるいはただの著作権だ。

そのとき、自分の知性はハダカデバネズミに劣ると反省しろ。

もういちど、あなたは「わたし」といって自分を指差せ。

すなおにやれ、あなたは自分の顔を指差すだろう。

ここであなたに、完全完璧な、生命維持装置をつけることにする。セツ

ト。これで何をどうやってもあなたは死ななくなった。

そこで、あなたの下半身を切り離してみた。あなたは死なない。

あらためて、あなたは「わたし」を指差してみなさい。

あなたは引き続き、自分の顔を指差しているだろう。

下半身を切り離しても、あなたの「わたし」は、下半身のほうには飛んでいかないらしい。

ひきつづき、あなたの顔面に「わたし」がある。

では思い切って、胸から下も切り取ってみよう。

それでもやはり、あなたは顔を指差し、「わたし」と言うことができる。ではつぎに、あなたの顔面を、ちょうど真ん中から、縦に割ってみよう。

あなたは死なない。

完全完璧な生命維持装置につないであるから死なない。

にもかかわらず、ここでけっこう、

「いや、死ぬじゃん」

と抗弁する人が多い。

死なないって前提であるだろ、悪あがきをするな。

剣豪が斬ったスイカ割りのように、あなたの頭部は右と左にまっぶたつに分かれた。

右頭部と左頭部は、二メートルの間隔をあけて、それぞれ台座に設置されることになった。

このときあなたの「わたし」は、頭部の右半分か、左半分、どちらにあるんだ。

それとも「わたし」は、ふたつに増えたのか。

さらに考えよう。

スーパースライサーを持ってきて、あなたの頭部を、水平に輪切りにしていく。

あなたの頭部は、頭頂からアゴの先端まで、二十四枚の輪切りにされた。

頭頂部から順に、一〜二十四の番号を振る。

あなたの「わたし」は、その輪切りのうち何番に入っているのか。

きつと一番ではないし、二十四番でもないだろう。

たぶん、あるていど真ん中らへんだ。

でも、その真ん中らへんのパーツも、さらに輪切りにできるからね。どこに「わたし」があるかなんて、じつは言えない。

漠然と、「わたし」といって、自分の顔を指差すが、それは習慣的に自意識が引かかる場所を指差しているにすぎない。

そもそも、あなたの身体って、皮膚も筋肉も脳みそも「細胞」で出来ているけれど、どの「細胞」があなたなんだ。

あなたの「わたし」って何？

まさか白血球や赤血球があなたではないわな。リンパ液も違うわな。

髪の毛の細胞なんかただのタンパク質だし。皮膚なんかさらに細胞としては死んでいる角質だし。

ただのタンパク質といえはすべての細胞がそうだけど。

しかも、あなたが設計したものじゃなくて、あなたが父母から遺伝子で受け継いだだけのものだしな。

タンパク質もアミノ酸も、だいたい炭素と水素と酸素と窒素で出来ているけれど、どの元素にあなたがあるんだ。

それらの元素も、けっきょく陽子と電子で、それらはけっきょくぜんぶ素粒子だぜ。

どのクォークに、

「あつ、これボクです」

つてのが入っているんだ。

そもそも、あなたは、父親の精子と、母親の卵子から生まれたんじゃないのか。

じゃあ聞くけれど、精子と卵子は、いつからあなたになったんだ。

精子と卵子は、受精して、卵割を進めていく。

一個の細胞は二個になり、四個になり、八個になり、十六、三十二、六十四、と増えていく。

「ハイここ！　ここでわたし、始まりました」

というのはいつの時点なんだ。

細胞が何個になったときなんだ。

で、そうしてあなたが始まる前、あなたはどこにいたんだ。

どこもあなたではない、ただのタンパク質の細胞だったものが、急遽あなたになるのはおかしいだろう。

こうして考えると、じつは「わたし」という現象は、いったいどこに根差していて、いつから始まり、どのような状態で得られているものなのか、さっぱりわからない。

いつもの「わたし」という、習慣があるだけで、その本質がどうなっているのかは、じつは誰にもわからない。

世界中の医者に訊いてみたらいい、まともな人は全員「わからない」とはつきり答えるはず。

救命救急医は毎日、患者の家族に向けて、

「心臓が止まっています。呼吸も止まっています。じゃあいまから瞳孔反射を見ますね。光を当てます……はい、反応がありませんね。じゃ、これで死んだってことにします」

ということをやっている。

ふざけているのではない、マジな話だ。

「えっ、これで死んだんですか」

「死んだとされています」

「本当にもう死んだんですか」

「それは誰にもわからないです」

「じつはいま生きていて、これから一分後に死ぬとか……」

「そうかもしれないんですが、とにかく、いまやった三つの確認で、死んだ、ということにしたらんです。いつどの瞬間に死んだのかなんて、境目は誰にもわからないんで」

「ほーん」

「わたし」はいつから始まったのかわからないし、いつ終わったのかもさっぱりわからない。

そもそも、細胞の組み合わせから突然ジャジャンと始まったのか、そのことじたいよくわからない。

「わたし」は、どこから来たのかもしれないし、肉体に棲んだあと、どこに行くのかもしれない。

わからないのだ。

そもそもさっき言ったように、「わたし」が体内のどこに棲んでいるのかさえわからない。

「わたし」といって、自分を指差しているつもりでいるくせにね。

むしろ理論的に言えば、元素を組み合わせでアミノ酸にし、アミノ酸を集めてタンパク質にし、タンパク質を組み合わせで細胞に、細胞を組み合わせで、それを、

「わたし！」

にする、ということのほうが理論的におかしい。

そんなもんいきなり「わたし」にやならねーよ。

すべてについて再現可能な科学しか信じないというなら、「わたし」という事象じたい否定しろ。

その、「否定」というやつをやっているのが、「わたし」だけどね。

このことから逃れられない。

どれだけ疑り深い奴になっても、この「わたし」が存在しているということからは逃れられない。

疑るということをやっているのが「わたし」だから、逃れようがない。

そのことをデカルトが指摘したのだ。

コギト・エルゴ・スムだ。

こんなことでどよめいているようでは、西洋人はアホだと言える。

これは人種差別ではない。

東洋人の誇りを示したつもりだ。

東洋の、仏教やインド哲学などでは、デカルトよりずっと昔にこの問題に気づき、それ以上のことを発見している。

色即是空、空即是色、でも仏性があるのだ。般若心経はそれでも仏教の中でイージーな教えだ。

(そもそもあれが「お経」なのかどうかには疑問がある)

ヨガではもともとアートマンといい、ブラフマンと合一して、梵我一如を目指すというのが前提だ。

古(いにしえ)からの、東洋の魂を引き継ぐなら、

「わたし、なんてものは、あるのかないのか、そもそもよくわからんものです」

ということ、初歩の初歩、すべての入口にしていなくてはならない。

東洋人ならわかるだろ、たとえば iPhone を使っていたとしても。

このあたり、現代人は本当に、まじめな意味でブッ壊れているのかもしれない。

本当に、AIが「わたし」を持っていないということが、感覚的にわかっていないのかもしれない。

キャバクラ嬢が客に営業メールをするとして、その営業メールはAIで代替可能だ。

あるいはアイドルが、SNSにつぶやきを発信して更新するとき、どういう文言がカワイイのか、アイドルっぽくてオタクたちに刺さるのか、そういうこともAIに相談可能だ。

相談可能というか、ようするにAIに複数作文させて、そのうちどれかを当人が選べばいいだけだ。

「この、みつつめのやつがカワイイなあ、これコピーして貼り付けよう」と

それなら、どれだけ頭がパーのアイドルでも、まるで気の利いたツイートができる女の子、というふうに見せかけることができる。

まあ、そんなことをしているうち、じきにアイドルの映像そのものが生成AIに置き換わると思うけれど……

生成AIの映像アイドルでも、こっちのつぶやきに「リプ」を返してくるようになったら、もうオタクたちには見分けがつかない。

いや、現代人には、じつはもうそのことに見分けがつかなくなっているのだ。

それはAIがどうこうではなく、人が、「わたし」のことばや声を現わすことができなくなったからだ。

「わたし」を現わすことができない。

もちろんふだん、「わたし」が話して、「わたし」がしゃべり、「わたし」

がツイートしているのだけだね。

その、自分でしたツイート、自分がしゃべったこと、自分の話す声やことばに、同一性がないのだ。

ん？

だから先ほど言ったこととつながってくる。

へのへのもへじを描くことはできる。

が、それを指差して「わたし」と言うことができないのだ。

じゃあAIに描かせても一緒でしょということ。

AIの問題ではなく人の問題だ。

なぜ同一性のある「へのへのもへじ」が描けないのか。

なぜ、独特のセンスがあるふりなどして、無理に奇抜な調子やタッチ

で、「個性的」なものを示そうとするのか。

個性的になんかしなくていいよ、あなたと同一性のものならそれだけでいい。

その、同一性のものというのが根こそぎむつかしいのだ。

へのへのもへじを一億枚描いても、そこに自分との同一性なんか現れてこない。

怖ええよなあ。

あなたは役所に言って、住民票を取ってこい。

それに免許証と、保険証、パスポートと、社員証や学生証を添えなさい。

い。

マイナンバーカードがある人はそれも添付して。

あなたはそれらをヒラヒラさせて、

「わたしです」

とすることができるだろう。

おれはこのエッセイを印刷して、ヒラヒラさせて、

「わたしです」

とすることができる。

おれはへのへのもへじの絵一枚でもそれをするだろう。

同一性だ。

ふつうはそんなことができないから困る。

何が違うのか、何をどうすればいいのか。

覚えておきなさい。

あなたが世界じゃないから悪い。

こんどは、世界を指差して、

「世界！」

と言ってみなさい。

どこを指差すといって、テキトーに目の前を指差すしかないだろう。

世界、という語の意味は誰でもわかる。

しかし問題は、あなたがそうして、

「世界！」

と言うとき、それはまるで、

「わたし！」

と言っているようではなくてはならないのだ。

なんであなただって世界と同一性ないの？

どこに住んでんだオメー、たまには冷静に考えろ。

世界と同一性がなかったとしたら、いったいオメーはどこに住んで、どこに生きているんだ。

ここに生きているんだ。

あなたがコップに酒を入れて、その酒を飲むとして、あなたはまさか、

「わたし」ではない酒を飲んでいるのか。

そんなもん、よく体内に突っ込む気になれるなあオイ。

で、体内に入ったら、それはもう「わたし」だと思っているのか。

そんなことないだろ、だってゲロ吐いたら、それは外に出てくるじゃん。

ん。

ワインの一杯も、パンの一切れも、そりゃ「わたし」じゃなけりゃ、本

質的な飲み食いじゃねえよ。

世界と同一性がないのが悪い。

ワインの一杯と同一性を持ち、パンの一切れと同一性を持て、世界と同一性があるのが当たり前だ。

だからへのへのもへじだって「わたし」であって当たり前だ。

いまこの文章は、へのへのもへじが書いています。  
そう言われたら、ほれ、へのへのもへじが「おれ」だろ。  
同一性があるじゃないか。

「へのへのもへじの同一性」

## 風情がないのは 才能がないからだ

いま、観光地に行くと、どこかしこも外国人だらけだ。  
風情も何もあつたもんじゃない。

これは悪口で言っているのではないし、人種差別をしているのでもない。

ただ、風情も何もあつたものじゃないのだ。

そんなこと言いながら、おれは、やっぱり温泉街の川沿いを、夜な夜な歩いていたのだけだ……

風情がブツ壊れるということは本当にある。

たとえば、京都に「哲学の道」というのがある。

かつて西田幾多郎が思索を深めながら歩いたと言われている道だ。

わたしはそこを歩いたことがある。わたしが歩いたときはよかった。

が、休日にはイベントが開かれていて、そこは観光地化されており、日本中から色んなおばさんがやってきて、哲学もクソもない、というような光景になるのだった。

別にそれが悪いというわけではないが、風情を期待してきた人がもしいたら、それはとてもかわいそうだと思う。

わたしが初めて伊勢神宮に行ったのは、中学校での修学旅行だったはずだったが、まるで記憶がない。

わたしの記憶に残っている、はじめての伊勢神宮は、いつぞやの夏にレンタカーを乗り回して、真夜中になり、

「伊勢神宮まで行くか」

と思いついたときだった。

伊勢神宮についたときは、たしか午前四時半とかで、ものすごい早朝だった。

いまはどうかかわらないが、当時はきつと、そんな早朝からでも参拝できたと思う。

それはもう、ものすごい光景だった。

この橋の向こうは、たしかに神域なんだ、という景色があった。

五十鈴川に流れているのは高天原の水で、そこにカミガミが色彩をほどこした錦鯉たちが泳いでいた。

古代ヤマトの国から続いている日本の森。

その中に、佇立する神殿が現れてきて、それはもう、夢のような出来事だった。

が、参拝を終えてしばらく経ち、観光バスがずけずけとやってくると、バスからは大量のおばさんたちが射出され、たちまち、あの神域はどこかへ消え去ってしまった。

くれぐれも、悪口を言っているのではない。

ただ、わたしは早朝にとんでもないものを見て、とんでもないものの中を歩き、そして観光バスが来たら、それはそれでとんでもなかったという話をしていただけだ。

何かを悪く言うつもりはない。いや本当に。

一般に知られている「観光」とは違うものもあるということを言いたいだけだ。

いま温泉街などに行くと、冗談でなく来訪者の九割が外国人という感じで、外国人のうち七割ぐらいは中国の人という感じだ。

家族連れが多いし、たまに若い男性だけのグループもいる。

女の子の二人組という場合もあり、たまに、日本のアニメのコスプレをして歩いている女性もいる。

どのアニメのコスプレか、バツと見てわからないぶん、わたしより彼女らのほうが日本のアニメ文化に通じているのかもしれない。

そして、とにかく風情がない。

わたしは、もうさんざん風情を楽しんできた組だし、風情が欲しければ

別のルートでのアプローチを知っているので、かまわないのだが、それにしてもこの風情への破壊力は何なんだろうと、いいかげん逆の関心が湧いてきた。

誰も悪い人たちではないのだ。

何がこんなに破壊的なのだろう？

それでよくよく観察していると、わかったことがあった。

彼らは、温泉の脱衣所に「突入」してくるのだ。

温泉の脱衣所に入ってくるとき、その足取りと氣勢が、スポーツジムや市民プールの更衣室に入るときと同じなのだ。

日本人とは文化が違うのだ、ということをもぎまぎ目撃した。

わたしの行く温泉の脱衣所には、のれんが掛かっている。

だいたい温泉というのはそういうものだろう。そして日本人は、何も考えていなくても、いちおうその暖簾（のれん）に対し、「くぐる」という動作をする。

われわれはのれんを「くぐる」のだ。

しかし外国の人は、スクリーンの向こうにエンターする、という動作しかない。

まるでアミューズメントエリアに入るみたいだ。

びっくりした。

もちろん、それは文化が違うのだから当たり前のことだ。

それで外国の人は、脱衣所の「すのこ」に、ガコンガコン蹴りを入れるような歩き方で、脱衣所に突入してくる。

わたしはじつと観察を続けて、次々に、その「突入」が繰り返されるのを見て、しみじみと、

「なるほどねえ」

と思った。

日本人は、のれんをくぐる人たちなのだ。

これは人種差別で言っているのではない。

本当に、文化が違うのであって、その文化はきつと、口で説明されても体得されるようなものではない。

のれんを「くぐる」ということ、そう説明するだけなら数文字で済むことだが、説明されたからといって伝わるわけがない。

これは情報ではなくて継承なのだ。

同じ日本人でも、その継承を受けていない人がいたら、その人はやはりのれんを「くぐる」ということはないわけで、人種にかかわらず、彼もやはり脱衣所に突入してくる人になるだろう。

外国人がつぎつぎに、脱衣所に突入してきて、着衣のまま露天風呂へ踏み入ってゆき、

「へえ、これがオープンエア・バスか！」

みたいなことをきつと言い、数秒見物して、満足してドタバタと退出していく。

そんなのが次々にやってきて、つぎつぎに出ていく。

風情なんかあってたまるか。

わたしは人種差別をしているのではない。

日本人がヨソの国に行ったときも、同じようなことをやらかしている蓋然性があるだろう。

かつて、日本人がエコノミック・アニマルと言われて蔑視されていたころ、それでもホステスのお姉ちゃんとかディーラーのおじさんはフランスを旅行し、よくわからないルーブル美術館をうろうろしていただろう。

そのとき、われわれ日本人が、当地にあった風情を台無しにしたということはきつとあったはずだ。

中国人が、日本の温泉地の風情を体現はできないように、われわれ日本人がセーヌ川のほとりに佇んだとしても、そこにヨーロッパな何かを現わすことはできない。

荒川の土手で盆踊りが開催されているというなら、われわれはその風情がわかるのだが、セーヌ川でどうこうというのは、あこがれのイメージでしかなく、われわれの継承した文化ではないので、その体現ができない。ただ、一方でこうも思うのだ。

ごくまれに、たいてい白人で、たいてい一人で来ている様子の外国人が、肩まで温泉に浸かりながら、頭まで真っ赤っかに染まっているという

ことがある。

(えっ?)

何をどうやったのか。温泉、露天風呂にあるべき風情というものを、彼はひとり全身で体現しているのだ。

わたしはおどろかされてしまう。

「すげえな、お前、なんか開眼しているなあ」

しみじみ感心させられてしまう。

そんなことであるのだろうか(じっさいあったのだけれど)。

わたしは男性なので、男湯のことしかわからず、わたしが目撃するのはいつも男性だ(当たり前だ)。

頭にタオルを乗せて、肩まで浸かり、顔を真っ赤にして、その表情がハ

ア・ヨイヨイになっている。

彼がたとえドイツ人であつたとしても、その口元からは、このとき日本の民謡でも流れ出てきそうなのだ。

ローレライの歌詞なんかぜったい忘れているだろう、としか見えない。

それを見てみると、

「コイツはひよつとしたら、のれんを『くぐる』のかもしれない」

とも思わされる。

「くあり 生き返るねエ」

と日本語で話しかけたら、そのまま伝わるんじゃないか、と思わされる。

すごい。

ゲルマン人のくせに、なぜ温泉でそこまで「出来上がれる」のか。

わたしはそういう人は、ある種の「才能」があるのだと思う。

その土地の文化、その土地の霊、その空の魂というものに、接続できてしまう奴であり、染まれてしまう奴なのだろう。

それを見ていると、わたしはこころの底から、

「ああ、愉しんでもらえているようでよかった」

と思う。

わたしは、信じてもらえないかもしれないが、内心ではけっこう愛国者

なのだ。

あなたはたしかに、ハコネのユに浸かったんだよ、グッドデイ、ハブアグッドトリップ、と内心で思う。

偉そうに……

わたしも才能のある人になりたい。

もうずっとむかし、わたしがインドのガンガー（ガンジス川）のほとりにいたとき、いろんなインド人が、熱心にインドの神話を教えてくれた。

エモーショナル・フレイムというものが引き継がれていて、破壊神と創造神とブラフマーがいて、ここがどれほど聖なる場所なのかということ、二時間ぐらいかけて立ち話で教えてもらった。

いつのまにか夜になっていた。

マニカルニカ・ガートといって、葬式をしている焼き場があり、そこを見物していると観光客はたいいてい、

「見世物じゃないんだ！」

と手を振って追い払われ、怒られがちなのだが、わたしはなぜか、その茶毘の煙にいぶされながら、

「父は、マリファナのやりすぎで早死にってしまった」

という話を聞かされた。

喪主らしき若い兄ちゃんだった。

彼は目に涙を溜めていたので、わたしはなるべくそれを見ないようにした。

マリファナのやりすぎか、それは残念だった、とわたしは言い、わたしは何とも言えず、悲しいか、とだけ彼に訊いた。

彼は首を振って、

「悲しんではいけない。悲しんだり泣いたりすると、魂があゝの世に行けなくなるから」

と、平静を努めて言った。

わたしは無力にうなずいて返すしかできなかったが。

わたしはいちおう、そうした彼に出会い、同時に、すでに死んでいる彼の父にも、そのとき会ったように思う。

そうしたものを、風情と呼ぶのはさすがにはばかれるが、どうかわたしもそういうとき、才能のある奴でありたいと望む。

何かが出来るというような、たいそうな才能は要らないが、誰ともわからない誰かの大切なものを、なぜか台無しにはしないという、そういう才能を持ちたい。

カミサマがいまこれを読んでいたら、即刻、引き続き、濃厚に、おれにその才能をよこすように。それぐらかまわんだろう。

いま、観光地に行くと、客は本当に外国人ばかりで、多くが中国人だ。

そして、風情は破壊されるのだが、それを見ていて不安になることがある。

それは、インバウンド客を応接している観光地側のスタッフも、しだいに風情を失っていつているように見えるということだ。

ただの気のせいだといいのだけれど……

毎日、文化の異なる人たちが来て、スポーツジムに入るような勢いで脱衣所に突入し、動物園のフラミンゴ池を見物するような目線で露天風呂を眺められると、日本人の側だって次第にわけがわからなくなるのかもしれない。

かといってももちろん、いまさら尊王攘夷運動を始めるわけではない。

かけがえないものを得て、かけがえないものを失う、それはただのトレードだ。

ただ、わたしは才能が欲しい。

才能がない奴が、けっきょく風情をなくすのだと思う。だから、わたしは才能が欲しい。

「風情がないのは才能がないからだ」

# 十五年

## つぶやきの

### 病

カリファ学校はすでに廃校になっている。自治体が管理する敷地内はいちおう立ち入り禁止になっているが、警備員が配されているわけでもなく、廃校カリファは放置されたままだ。

カリファの敷地内にあるいくつかの構造物に、物珍しいものは何もなかったが、覆いもなくむき出しになっているかつての水泳場の基礎部分、そこにいくつかの動物が棲みついているらしい。コンクリートで形成された暗い構造脚部はぐるりをフェンスで囲われているものの、小さな動物たちならその隙間を低く潜れるというわけ。

その暗がりに生活する齧歯目の動物たちに混ざり、中肉中背のルーディが棲みついている。彼の着ている衣服はすでにかつての色彩を失い、暗がりに溶け込んでほとんど無彩色のものに見える。

ルーディは、

「自我に穴があいた」

と言い、そのフェンス防壁から出てこない。そうしてかれこれ数か月が経った。どのようにしてフェンス内部に入り込んだのかは、ルーディ自身思い出せないという。

配管から微弱な水漏れがあり、ルーディはそれを手ですくって飲み、の

どを潤している。食事はどうしているのかと訊くと、走り回る齧歯目たちの死骸がしばしば出るそうで、ルーディいわくそれは「食える」ものだそう。ルーディの行状はすでに狂人のそれと思われたが、フェンス越しに對話してみると、意外にそこまで精神が荒廃しているという印象を受けない。

「ルーディ、自我に穴があいたというけれど、それはきみだけではなく、この時代に生きる者なら全員が同じことじゃないか？ 何もきみだけそうして暗がりに隠遁していることはない。また、きみだけそうしてうずくまっ

ていても、そのことはきみを救済しないだろう」

それはそうだろう、とルーディは言った。

ルーディはフェンスのそばまでにじりよってきて、  
「もういちど説明を聞かせてくれ。合理的な説明をだ。きのう話してくれた、あの説明でかまわない。あれをもういちど、聞かせてくれ」

ルーディの前歯の隙間には、たしかに捕食した齧歯目のそれであるらしい、毛皮の断片が挟まっていた。なるべくそれを見ないようにして、

「いいだろう、ルーディ、ではもういちど、同じ話を聞かせてさしあげ

る。さあルーディ、この十五年のことを思い出せ。すべてのことはじつにささやかな、きみとのマージャン遊びの中で始まったのだった。いまでも覚えているよ、きみが漏らしたのはこうだった。ぼそぼそ……ウーソーを捨てればリャンメンだから……でもドラの受けがなくなるか、えーぼそぼそ……。きみは頭をぼりぼり搔いていたな。われわれはそこで、おい聞こえているぞ、と言って笑ったのだった。しまった、ときみは言い、それでもきみはウーソーを捨てた。そしてリーチを掛けた」

「覚えてる。それで、ウーソーのまたぎスジは誰も捨てなくなった。とうぜんだ。それで順は巡り、逆におれが放銃してしまったんだ。それでおれは、三千九百点を支払った」

「そのとおりだ。よく覚えているなルーディ、はじまりはただそれだけのことだった」

上空を冷たい風が通り過ぎ、生徒たちのいなくなったカリファ中庭の、カエデの木から枯葉をもぎとっていった。

「われわれはきみの漏らした、そのつぶやきということに惹かれ、その面白味に興じていったのだった。当たり前だがルーディ、ウーソーを捨てればリヤンメン待ちでテンパイになるということは、外部に漏らしてはいけないことだよ？ それは本来、きみの自我の内部に留めておかねばならない想念だった」

ルーディはうなずきつつ、しかし、  
「それはもう不可能になったろう」と言った。

それについてはこちらも頷いて返すしかない。

「ルーディ、本来は、自我のうちに留めておかねばならないことを、つい口先から漏らしてしまうということがある。そのことは、かつてつぶやきと言われ、厳密にはきつと失言に分類されるものだった」

これはきのうの説明にはなかったことだが、と注釈し、

「きみがウーソーを捨ててリヤンメン待ちをテンパイする、と漏らしたことに付いて、あのときじつは、われわれの側もつぶやきを漏らし返してもよかったんだ。ただ当時、われわれにはそこまで発達はしていなかったから……つまり、こいつ自分の手の内をつぶやいて漏らしていやがるよ、というつぶやきを、即座にわれわれの側から漏らして返すという手もあったのさ。でも当時は、そこまでわれわれの自我に穴があいていたわけではなかったたので、そこまでの発想は湧いてこなかった」

このときルーディの目は、透明度を失って濁っており、いま話されていることの肝腎などころまでは聞き取れないという様子だった。

やれやれ、という思いがして、

「ルーディ、もはや思い出すことさえできないことだが、当時のわれわれは、つぶやきを無言のうちに漏らすということもなければ、内心のものを無音で空気に漏らすというようなこともなかったのさ。とうぜんだ、当時われわれはまた、つぶやくという機構を持っていなかったんだから」

「十五年前はそうだった。しかし、それは何年前というより、いまはまったく違う場所の話に聞こえる。おれたちはいつのまにか、まったく違う場所に来てしまったのか。たかが、つぶやくということの遊びで」

「そうかもしれない。たかが遊びと言うけれど、それはこの十五年間、あきらかにわれわれの文化だったじゃないか」

文化によってわれわれの体質は決定づけられるということは大いにありうるのじゃないか？ そのように問うても、ルーディからの返答はなかった。

「われわれは、つぶやくということの本質も忘れて、それに興じて、そのことに遊びつくした。大いに笑ったね、それもまた事実だ。かつては内部から漏れようがなかったものを、あえて全面から放出するようになった。それが面白かったんだよ。その遊興は、やがてわれわれの体質になっていて、いつのまにか、もうそのつぶやきを内部に留めておくということじたいができなくなった。たとえ口に出さないようにしていてもね。全身から、無言のそれは噴き出すんだよ。漏れている、漏れている。それがまた、おかしくてしうがなかった」

「おれにはそのいちいちが刺さっていたのさ」

「そのいちいちが刺さっていただって？ ルーディ、それは誰だって同じだ。よく考えてみる、われわれは内部のものを内部に留めておけなくなつたわけだろう。それはダムで言えば、堤（つつみ）に穴があいたというようなことだ。その穴は拡大してゆき、やがて湖底にまで達し、貯水のいっさいは不可能になっていく。そしてついには、堤というその存在さえなくなるだろう。このときどうなる？ 堤も水門も失われて、出入りは自由。その跡地には、ひょっこり野鹿の親子でも入り込むだろう。^^内部のものが流出するということは、外部のものが流入するということもあるvv」

話されていることを、まるで聞き取りたいのか、コンクリート脚の影から、二匹の齧歯目がこちらを覗き込んでいた。

すべてのことはおれに刺さり、おれに入り込んだ！ ルーディはとつじよ強い声で言った。

「隣国の、そのまた隣国の、名前の字面さえ読めない誰かが、あたらしく建造する自分の家を、手焼きのレンガ造りにすると言っている。それはそうなのだろう、炉でレンガを焼く工程まで見せてもらったのだから。彼らはきつとそうするだろう。そうしてまるで、手焼きのレンガで家を建て、

その中に住むということは、まるでおれのここのようになった」

内部のものが流出するということは、外部のものが流入することでもあるのか。

「ドルモント山荘は、小さいけれど設備の良い山荘で、しかも利用料が安いからとても人気がある施設だ。それにお世話になっているという人はたくさんいる一方で、ドルモント山荘の主人は、女性のひとり客には執拗すぎるアプローチをしてくるんだ。気をつけなくちゃいけないな！ それで一度、本当に怖い思いをしましたって人もいるんだ」

「ルーディ、もともとはただのつぶやきだった。たかがウーソーを切ってリヤンメン待ちでテンパイするということの漏出、つい口先から出てしまったこと、ただそれだけだった。つぶやき。それが、きのうも説明したとおり、たまたま電腦通信端末の機能性とよく合致したのさ。われわれの遊びは、垣根をこえ、世界中に飛び火してゆき、たちまち同時代全員の文化になった。そして十五年ものあいだ、それを加速して遊ぶことに誰ひとり躊躇しなかった。きのう説明したとおりだ」

ルーディは首を横に振り、なおも強い声で続ける。

「アジンバラ蚊に刺された者は、それで病気になるわけではないけど、無気力な人間になるらしいよ。ちょうどおれみたいに。だからおれはアジンバラに分類される。たとえその蚊に刺されたわけではなかったとしても、分類上はアジンバラになるんだ。そしておれのようなアジンバラは、トールスタン・タイプと相性が悪いから、たとえば職場でトールスタンと出くわすと、すぐに逃げ出して退職してしまうんだよ」

「なんだい、そのトールスタンというのは」

「知らないよ！」

ただおれは、どうしようもなくアジンバラなのさ、たつぷりとな、とルーディは吐き捨てて言った。

ルーディの話は多岐にわたった。

「コディニ・ソースの作り方を知っているか。多くの人は、コディニチーズを白ワインとコンソメで煮て溶かすと思っているようだけれど、じつはそうではないんだ。コディニ・ソースを作るのに本当は酒やコンソメは要

らないのさ。コディニチーズを水で煮て、そのときマセトンという薬草と一緒に入れる。マセトンでコクを出すのが本格なのさ。あるいは地域によっては、マセトンじゃなく櫃花草の根を入れることもある。どうだこれがおれさ。これがおれなのか？ おれはコディニ・ソースを作ったことがなく、それどころか、口にしたことさえないっていうのに」

ルーディは、フェリエ競技チームの現監督、シートフィールド教授の指導方針については大いに批判的であるそう。彼の選手に対する叱咤はまるで懲罰であり、選手たちを萎縮させ、さらには精神的に傷つけてもいる。またシートフィールド教授は、公正な実力主義で選手を選抜する旨を公言している反面、内部では恣意的なえこひいきがある。公開共有される評価シートスコアにもとづいて選抜されるというのは事実だが、そのシートへのスコアリングじたいにえこひいきがあり、その実態にもう清潔感はない。いまやこうしたことすべてについて、競技じたいに真剣な選手たちこそ、猛反発を示しだしている。

シートフィールド教授には、たしかに過去、別チームを準優勝まで導いたという実績があったが、その実績もいま振り返れば、単にすぐれた選手を擁していたからであって、特段に監督の指導に功績があったとは言えない。

「だからもう、本大会の始まる前、シートフィールド監督は終わりだと思うけど。どうだ、これがおれさ。これがおれなのか？ へへなぜおれはこんなことに確信があるんだ？ ヴ」

ルーディの語りかけは切迫しており、また説得力も伴っていた。ルーディの言いようにその様相には同情を寄せるしかない。きっとルーディの言っていることは正しいのだろう。

「ルーディ、この十五年のうちに蓄積したものを、一夜で代謝することはできないさ。きみはつぶやきを漏らしたのだった。きみは流出をしたぶん、その穴から、何万倍もの流入を受けた。きみはただ、ウーソー切りのリヤンメン待ちを漏らしただけなのにな。それでも、その流出穴は広げられたし、その穴の拡張は大いに、電腦通信のテクノロジーが担った」

どさりと音を立て、ルーディは地面に倒れ込んだ。胎児のようにうずく

まり、鳴咽を漏らしはじめる。

「なぜおれはこんなことに確信があるんだ？ 何ら、おれが体験してはいないものを、なぜおれはこうも絶対に確信しているんだ」

「ルーディ、きみが体験していないものなら、きみに与えられているものは、ただの錯覚なのかもしれないよ」

錯覚、という語を使うと、とつじよ地面がたわみだした。それこそ錯覚かもしれないが、地面はきゆうに緩いすりばち状になってゆき、そこに立たされるのはじつに不安定になった。

錯覚。

ルーディ、ルーディ。そんなにうづくまっていなくて、さあ。電腦通信とその端末は、われわれに錯覚を流入させる装置に違いない。もともとはわれわれ自身が蒔いた種とはいえ、きみはそれによってうづくまってしまうことになる。それにしても、きみに流入するものが錯覚にすぎないのだとしたら、それはそこまで恐れるほどのものではないのじゃないか？ 錯覚が流入する、いやきつと正確には、外部のものが内部に流入して、それが自分内部のものだと錯覚されるということだろう。それにしても、それはけっきょく錯覚にすぎないんだ。

引き続くうづくまったままのルーディから、声が発される。

その音色はまるで、人知れぬ排水溝から響いてくるかのようなだった。

「ソーウジャーナーイー」

思わずあとずさりさせられるが、すりばち状にたわんだ地面は不安定でよろける。

うづくまったルーディの口調はうづいぶん間延びしている。

なぜこんなことに確信があるんだー。おれは、数か月前、ここに入り込んだときから、電腦通信端末を持ち込んでいない。それで、どこかの誰かがレンガを手焼きして家を建てるとか、ドルモント山荘の主人は性的に危険だとか、おれは救いたいアジンバラでトルスタンにはやられるだけとか、コデイニ・ソースはマセトンこそ本格だとか、シートフィールド教授は指導者には堪えないとか、そういったことが、電腦通信端末から得た情報なのか、そうでないのか、おれにはもうわからないんだ。いやきつ

と、おれは、電腦通信端末からそんな情報を得てはいない。にもかかわらず、おれはそうした情報に確信を持っている。まるでその情報こそがおれ自身であるかのように、おれは絶対の確信を持っている。ひと眠りして、起きたときには確信を持っている。気を抜いて、齧歯目どもが走り回るのを眺めていると、ふと、やはりいつのまにかおれは確信を持っている。どこから入り込んだかわからない情報について、まるでそれこそがおれ自身であるかのように、おれは確信を持っている。

ルーディはのっそりと起き上がり、

「なあ、この情報はどこから入ってくるんだ」と言った。

「電腦通信端末を持ち込んではいないのか」

「持ち込んでいない。だいいち、こんなところに数か月もいて、バッテリーがもつわけないだろう」

電腦通信端末がなくても、外部の情報が入り込んでくる。

いや、それは錯覚だ。錯覚にすぎないはずだ。

外部のものが、自我の穴から流入し、自我の内部に入り込むことで、それはまるで自分のことのように錯覚される。

ルーディ、錯覚だ、ただそれだけのことははずだろう。

「お前はいま、外部のものが流入してきて、それが自分のことになると言っただけだ」

ルーディはいっそ、余裕さえ見せ始めている。

「お前はそれを錯覚と言いつけるけれど、それはつまり、^^錯覚こそが自分^^ということじゃないか？」

それとも、とルーディは言った。

「それとも、お前は、ひとつひとつのことを体験してきたというのか」

隣国の隣国で誰かが、レンガを手焼きして家を建てるとかいうようなことを、お前は^^体験^^してきたのか。

そうルーディは詰問してくる。

ルーディ、お前の言いたいことはわかる。しかし、落ち着いて考えなおせ。

「お前こそ考えなおせ。おれたちはこの十五年間、つぶやくという文化を進んできた。つぶやきを流出させ、つぶやきが流入してきた。毎日がそれだった。それで毎日が大騒動だ。なにひとつ体験はしていないのにな！そうして十五年間、おれたちは、錯覚を得つづけてきて、体験のすべて捨ててきたんだ。その中でおれたちが発見したのは何だったか？ おれたちが発見したのは、錯覚こそ自分だったということだ。錯覚がおれで、錯覚がお前だ。誰だって自分ということだけは確信がある。デカルトが言ったように、自分だけが確信だ。そして自分とは錯覚のことだ。錯覚だけが確信なんだ」

おれたちは確信を持ったときにつぶやくだろう。おれは、ウーソーを切つてリャンメン待ちにするか、それともドラの受けを残すべきか、確信が持てなかった。麻雀牌を引いて、捨てて……そんな体験に確信は持てないからな。だからおれはつぶやいた。ウーソーを切つてリャンメン待ちにしよう。つぶやきは錯覚され、錯覚はおれになり、錯覚は確信された。

自我に穴があいて、これはもう元には戻らない。すべての体験は失われ、そのかわり無制限の錯覚を手に入れたのだ。それは無制限の自分だ。このことは、電腦通信端末を捨てたところで変わりやしなかった。

「錯覚が自分だ。穴があいたという言い方を、より正確に言い直そう。それは門が開いたのだ。錯覚の門さ。錯覚の門が開き、その門は自分へとつながっている。その錯覚の門を通して、流入するすべてのものは錯覚となり、流出するすべてのものはつぶやきとなる。ハハハ、お前は どうせ、ウーソーを捨てずドラの受けを残せばよかったのと思っていたんだろう？ そのお前らのつぶやきはおれの内部に届いている。いまや電腦通信端末がなくても、すべてのことはおれの内部に届いている。おれにはその確信があるのだ。錯覚だなんて言い張って、その錯覚こそが自分だという真実から目を背けるな。誰も、自分ということ以上の確信を持つことはできない」

「ルーディ、きみの主張は真新しく、聞くべきものを含んでいるが、もう日が暮れてきたのだ、すべてのことはあしたにしよう。わたしも少しめまいがして、まるで地面がすりばちのようにたわんで感じられる」

そのように約束したものの、どうしても翌日からルーディのところには行く気にはなれず、そのうちいくつかの季節が過ぎた。

ルーディのことをすっかり忘れたころ、人づてに、廃校カリファが解体され敷地は更地に戻されたという報せを聞いた。

その後のルーディがどうなったのかは杳として知れない。

ただ、あのときルーディの主張したことが、いまもぼんやりと記憶に残っている。

十五年間、たしかに自分たちはつぶやき文化の中を進んできた。

そしてルーディは、錯覚こそが自分だと言っていた。

錯覚の門が開き、すべての体験を失った、とも。

錯覚が自分だからこそ、錯覚にこそ確信が得られる。

まるで自分のことのように……

ルーディはそう言っていた。

いまさら電腦通信端末を退けたところで、このことはもう変わらないのだろう。

「TweetV: われわれはこの十五年、たしかに「つぶやき文化」の中を生きてきただろう。自我内部のものが漏れ出して、そのぶん外部のものが自我内部に流入する。穴があいているから、流出もするし流入もするということ。それでふと気づくと、自分が体験したわけでもないことが、まるで自分のことのようになっている。すべてのことが、無制限に、自分のことのように思えてくるし、他人のことにも、自分を流入させてよいような気がしている。そうしていつも騒動が起こり、一方、その中でわれわれはまったくしたかな体験を得ないままだ。体験は得ないまま、時だけが過ぎていく……すべてはこの先、われわれが体験を回復できるかどうかということに懸かっているのだと思う。とはいえ、思い詰めてもやりきれぬわけではないので、落ち着いて、ただ体験の回復に向けて確実な歩みを進めていかなくてはならないだろう。」

そうつぶやきのプラットフォームに投稿すると、フウ、と思わず嘆息が出た。

数分すると、レスポンスがついたらしく、効果音が鳴って、

Res>.: な？ 言ったとおり、お前は確信を持ったときつぶやいただろう？ どうしてお前は、こうやって自分内部に留めるべきことを、わざわざ漏出してしまうのか。答えよう、錯覚こそが自分だからだ。お前はきょうもこうやって、体験はせず錯覚をしている。体験はせず確信のみをしている。きょうもお前は錯覚の門を開いている。錯覚こそがお前だからだ。お前はずっとこのことだけを続けていくだろう。

ただ、むかしのこと、あのときのマージャンでお前は負けてしまったけれど、あのときのマージャンは本当に楽しかったよ。そういえば、ずっと言い忘れていたことがあった。あのときたしかにお前は、ウーソーを捨ててまたぎスジでリーチを掛けた。たしか待ちはサブローソーだったよ。

でもあのとき、よくよく見ると、おれの手はノーテンだった。マンズがメンツになっていなくて、早とちりで、要するにチョンボだったんだな。そのあと放銃して、三千九百点で済んで助かったと思っている。あのときに戻って言うなら、あのときに限っては間違いない、それがおれだったよ。

#### 「十五年つぶやきの病」

## ポカロPと

## 呼ばれる人たちは

## どんな音楽を

## 聴いてきたのだろうか

仄聞するところ、ポカロPは死ぬものらしい。

なんだそのデタラメな話は。

わたしもよく知らないが、ポカロPと呼ばれる人たちには、何かしらの理由で早逝してしまう人が多いらしいのだ。

このことは、詳しく知っている人にとっては、「ああ、あれとか、あれのことね」と察せられることだと思うので、いちいち説明はしない。

このことは、詳しく知らない人にとっては、知ってもしょうがないことだし、説明されてもわからないことだろうから、説明はしない。

そういう横着なことを考えている。

何かを馬鹿にして言っているのではない。単に本当に、わたしも詳しく知らないのだ。

現代の若手のポップスシンガーは、「歌い手」と言えばよいのだろうか、一時期の「ニコニコ動画」から大きな影響を受けているのだろう。

現代の若いポップスをYoutubeで観ると、MVは物憂げなアニメ絵で展開してゆき、歌詞が「ちりぢり」に表示されたりして、

「ああ、いつかの、ニコニコ動画の続きだなあ」という感じがする。

彼らはきっと、古巣というか、出自がニコニコ動画なのだろう。

あるいは、出自がニコニコ動画というのは言い過ぎだとして、出自はつまり「ボカロ」なのだと思う。

そのことには何の不思議もないし、何の違和感もない。

十五年前、ボカロブームはものすごい勢いであつたのだから、それを出自とする歌い手が現代を席卷するのは当たり前だ。

ただここで、わたしにとってさっぱりわからないことがある。

ところでさつきから、じつにどうでもいい話ばかりしているが、もともとエッセイとはこういうものなので、こういう感じでいいのだ。

たいして目を瞠（みは）るような話は出てこない。

エッセイなんてそんなもんじゃないか……

エッセイなんてそんなものだが、中でも遠藤周作のエッセイは、小説と落差がありすぎて度肝を抜かれる。

小説の重苦しさに比べて、なんだこのエッセイのやる気のなさは。

「コイツいくらなんでも書く気なさすぎだろ」

という怒りさえ湧いてくる。

なので、けっこう面白いので、もし機会があれば手に取ってどうぞお試しあれ。

あまりにも脱力すぎて、おれは最後まで読めなかった。

かといって小説のほうも、内容がへヴィすぎて、最後まで読むのはたい

へんなんだよなあ。

どちらにしても極端な奴だ。

（かならず、「沈黙」は「侍」よりも先に読んでください。これを逆転させると大変受け取りづらくなるので）

話をボカロPに戻す。

現代の若い歌い手が、ニコニコ動画やボカロブームを出自にしているというのはわかる。

ただ、そのボカロブームの仕手側になったはずの、ボカロPと呼ばれる人たちが、彼らが音楽的にどのような出自なのか、さっぱりわからないのだ。

誰か詳しい人がいたらマジで教えてくれ。

たとえば、桑田佳祐さんの出自は、ボブディランや小林旭、そしてビートルズだ。

あの世代でビートルズの影響を受けていないロックシンガーなんていないだろう。ミスターチルドレンやスピッツだって、ビートルズは聴いてきているはず。

あるいは、B'nの稲葉さんは、どういう出自なのか、わたしはまったく知らないけれど、たとえばディープパープルやボンジョヴィなどのハードロックを聴けば、「詳しく知らないけれど、こういうのが出自でしょ」と思える。

細川たかしさんは演歌歌手だが、出自はあきらかに民謡だ。

美輪明宏さんは物々しいパフォーマーだが、出自はシャンソンだろう。

和田アキ子さんはジャズやソウルが出自だと思われる。

それぞれのミュージシャンの出自なんて、その筋のマニアでなければ知らないだろうけど、それでもふつう、出自がまったく「見当もつかない」なんてことはない。

ロックンロールの出自は、その土台にカントリー音楽があつたのだろうし、ソウル音楽の出自は、その土台に黒人霊歌とかがあつたのじゃないかと思える。

その中で、唯一、「ボカロ」だけ出自がわからない。

もちろん、ボカロPといって、つまり初音ミクをイメージしているのだけれども、これは擬人化されたシンセサイザーでしかないのだから、シンセサイザーそのものに出自を問うているわけではない。

初音ミクの声じたいの出自を問うのであれば、出自はヤマハ（株）ということになってしまう。

このわけのわからない話をわかってもらえらるだろうか。

わたしは、あらゆるクリエイターというのは、クリエイションに先立つ「体験」があるだろう、ということを書いているのだ。

つまり、先に音楽体験がなければ、人はそもそも音楽家にならないだろう、という当たり前の話をしている。

仮に、若かりしころの桑田佳祐さんが、洋楽として輸入されてきたビートルズやボブディランを聴いて、それに惚れて、その音楽体験からミュージシャンになっていくということは、あって当たり前だろうということ。

あなたは何の体験もなく、いきなり、

「エジプトうなぎ音頭の叙事詩を人形浄瑠璃で上演した〜い」

なんて言い出さないだろう。

基点となる体験があるはずなのだ。

それが、現代の若いポップスの歌い手の場合、きっとボカロだったんだろうなあと推察している。

一方で、ボカロブームの仕手側になったはずの、ボカロPと呼ばれる人たち、彼らの基点となる音楽体験がわからないのだ。

このことは、本当にわたしを、奇妙な感覚で混乱させる。

ボカロPと呼ばれる人たちは、どんな音楽を聴いてきたんだろう？

初音ミクは、擬人化されたシンセサイザーで、それも「すごい硬度で擬人化された」シンセサイザーだった。

でもいちおうシンセサイザーだから、系統としてはいわゆる「打ち込み」になるのだろうか。

かといって、ボカロPの作り出すサウンドから、YMOなどの懐かしいテクノの響きを聞き取るわけではない。

ディスコのズンドコしたものが聞こえてくるわけでもない。

トランスとかドラムンベースとかはありうるのかもしれないが、そっち方面の人たちなら、少なからずハウスとか、ヒップホップとか、レゲエとか、そういうものの影響も受けているはずだが、そういったものの気配はまったく感じない。

まさか、陽キャの極みのような、アホみたいなユーロビートで育ったとも思えない。

シテイポップとかも世代が違うのだろうし、シンセサイザーといって、まさか「そして僕は途方に暮れる」からボカロPになっていったとも思えない、

ナゾだ。

わたしはボカロPの実態なんて、一ミリも知らないのだが、少なくとも一般に与えられているイメージとしては、彼らは、

「作曲家として色々サウンドクリエーションしてきましたが、今回の新作は、ボーカロイドに挑戦してみました」

という感じではないと思うのだ。

ボカロPは、作曲家が初音ミクというシンセサイザーを使い始めたというのではなく、ほとんど初音ミクのリリースと同時に発生してきているように思える。

それで、ボカロPの出自がわからない、と感じる。

出自にこだわりたいわけではなく、ボカロPと呼ばれる人たちの、基点となる音楽体験について知りたいのだ。

若手シンガーがボカロの音楽体験を基点しているのはわかるのに、そこから遡って、ボカロPの音楽体験は不明というのは、どうにもモヤモヤする。

正直に言うと、ボカロPたちの出自は、アニメアイドルです、というふうに見えるのだ。あるいはそのように聞こえる。

もちろん、たぶん、そんなことはないだろう。

そんなはずはないよな、とわたしは思っている。

さすがに、プロレベルで通用するサウンドを創り出すためには、基点となる音楽体験が必要はずだ。

たぶんそうだよな？

たぶんそうだと思うのだが、正直なところ確証がない。

うーむ。

わたしが何にこだわっているか、わかってもらえるだろうか。

現代の中高生は、YOASOBIとか米津玄師とか、「ボカロ以後」のミュージシャンを聴いているのだ。

そしてたとえばYOASOBIは、自殺をささやきかける歌を唄い、その歌が27億回も再生されているのだ。

これらボカロ以後のミュージシャンたちが、ひよつとすると、^^音楽の歴史的系譜には接続せず発生しているかもしれない^^、と言っている。

あああ、ボカロPはいいたい「何を聴いて育ってきた」んだよ。  
そもそも「ボカロP」という特殊な呼称にあらためて注目する必要がある。

ショパンがピアノ曲を作ったからといって、ショパンのことを「ピアノP」とは言わない。

山田耕柞のことを「童謡P」とも言わないし、久石譲さんのことを「ジブリ音楽P」とも言わない。

初音ミクは、高硬度に擬人化されたシンセサイザーだった。そのシンセサイザーが主旋律を奏でる——唄う——楽曲を作成し、その演奏を音源化し、人々に届けてヒットさせるということには、^^あたかもV、初音ミクという少女をアイドルシンガーとしてプロデュースしていくというような錯覚があったはずだ。そしてその仕手側にはとうぜん、アイドルシンガーを羽ばたかせていくプロデューサーのような「心地」が強く得られたに違いない。もちろんその心地は錯覚であって、じっさいにはそこに少女はおらず一台のシンセサイザー・アプリがあっただけにすぎないにせよ、当時のボカロブームにおいて人々はこの錯覚におおいに遊び、この趣味におおいに興じたはずだ。

それゆえに彼らはボカロPと呼ばれる。そのことはすぐわかる。  
が、そのぶん、彼らの音楽的出自がわからないのだ。

初音ミクより遡って、彼らの基点となる音楽体験がわからない。

まるで、アニメアイドルのプロデューサー、その「心地」じたいが、彼らの出自、彼らの基点になっているように感じられてしまう。

かといって、さすがにアニメアイドルにぞっこんというだけでは、音楽なんて作曲できるわけがないので、音楽制作にかかわってはプロとしての知識や技術を持っているのだとは思うが……

ただそれというと、こんにちでは、作曲というのは生成AIでもけっこうなレベルで出来てしまう。

表面的な知識や詳しさ、技巧についてとやかく言っているわけではもちろんなく、単純な、真の意味において、基点になっている音楽体験は何だったのか、ということが気になっているのだ。

まさかのまさかで、初音ミクというアニメアイドル少女の、存在の錯覚、さらに彼女を羽ばたかせるといふプロデューサーの心地の錯覚が、すべての基点になっているという可能性もあるではないか。

もしそういうケースがあったとしたら、その場合は、彼は音楽体験によらず歌曲を制作し、それをヒットさせたということになる。

であればそれは、これまでの音楽の歴史的系譜には所属していない。

彼の所属する系譜はまったく別のものだ。

古く「二次元」と総称されたもののうち、流行するオタクアニメがあり、その作中にはアニメヒロインがいた。彼女らへの愛好は「2ちゃんねる」などでさんざん言い合われた。また「二次元」と総称されたものには、アニメだけでなくコンピュータグラフィックで表示される、たとえばギャルゲーなどのヒロインも含まれていた。ゲーム方面では、そのヒロインに対して何かしらの操作ができるという、放映アニメとは異なる楽しみの要素も当然あった。

一方で「三次元」と総称された側では、アイドル文化が隆盛し、三次元のアイドルは唄ったり踊ったりした。また三次元ではアイドルが「プロデュースされる」ということの流行もあった。アイドルはとうぜんステージに立つものであって、そのことは当時の「二次元」にはあまり取り入れられていない要素だった。

この、当時の二次元のヒロインと三次元のアイドルを融合させて、そこに初音ミクの像を結んでいくということは、われわれの想像力にとって難(かた)くないことだろう。

初音ミクは、じつはあたらしい音楽形態の出現ではなく、あたらしいヒロイン、あたらしいアニメアイドルの出現だったのではないか？

操作できるアイドル、舞台に立つことができるヒロインだ。

この仮説に立ち、もしボカロPと呼ばれる人たちが、基点となる音楽体験に抛らず、あたらしいアニメアイドルおよび、そのプロデューサーの心地の錯覚を基点としたのであれば、この方面から発生していったものは系譜的には音楽・歌曲とは呼べないことになる。

では、そうしたものはいいたいどう呼べばいいのか。

あくまで、ここで唱えている仮説に則った場合という限りになるが、これらのものはやはり「つぶやき」と呼ぶしかない。

錯覚を基点として始まっているのだからつぶやきだ。

音楽体験を得ることが出来なかったとしても、初音ミクに何かを錯覚することは出来たという可能性がある。

単純に考えてみてくれ。

たとえばポールマッカートニーが、ひとりで部屋にいて、おもむろにギターを鳴らし、口から何か音声を出している。

このときポールは唄っているだろう。

まったく同じ状況で、「ボカロP以後」の誰かがひとりで部屋にいて、おもむろにギターを鳴らし、口から何か音声を出している。

このとき彼は「つぶやいている」のではないか？

このときポールが何かを「錯覚」しているとはいえない。

「ボカロ以後」の誰かは、何かを「錯覚」しているのではないだろうか。

桑田佳祐さんが、ひとりで部屋にいて、あらためてボブディランのレコードを再生したら、やっぱり桑田佳祐さんはあらためて「音楽体験」をするように思う。

そうしたことは、見ているだけでわかるところがあるじゃないか。

ボカロPがひとりで部屋にいて、ボブディランのレコードを再生したら、ボカロPは「音楽体験」をするのだろうか？

そのことがどうしても想像しづらい。

ボカロPは、レコードの再生を止め、何かアニメ動画を再生し始めるような気がするのだ。

こんなもの、もちろんただの偏見でしかないのです、その点はどうしようもなくおわびしておく。

的外れだったらひたすら謝罪するしかないし、仮に的外れではなかったとしても、こんなものは謝罪申し上げるしかないところだ。

もし、ポールマッカートニーから、ポール自身が唄う歌として作詞作曲を依頼されたら、ボカロPはどんな曲を作るのだろうか。

そのときは、ボカロPならぬポールPになるわけだが、ポールはアニメ

アイドルではなく、実在のミュージシャンでありシンガーだ。

もし、アニメアイドルへの錯覚を基点にしている場合、ポールに対する作詞作曲にはまともにはたらくことができない。

桑田佳祐さんが、部屋でひとり、アコースティック・ギターを布切れで拭くということをしていたら、そのとき彼の全身からつぶやきがムワツと出ているということはないだろう。

ボカロPと呼ばれる人たちが、どんな人たちなのか、わたしは本当に知らないのだが、アコースティック・ギターを布切れで拭いているあいだも、その全身からつぶやきがムワツと出ているという人はいるだろう。

わたしは意地悪を言っているわけではない。

あなたが十五年間ずっと抱えてきた違和感を暴露しようとしているのだ。

あなたの場合はどうだろう。

あなたは、部屋でひとり、ボブディランのレコードを再生したとして、本当に「音楽体験」をするのだろうか。

そのことは、とてもあやしいものだと思う。

意地悪を言っているのではないし、あなたを苦しめようとしているのではない。

あなたはそのことで苦しんできたのではないか、と言っているのだ。

わたしの知る限り、とても単純なこととして、一枚のレコードを聴くとき、それを純粋な体験とできる人はそんなに多くない。

むつかしいのだ。

そんな、音楽体験なんてね。

ふつう、体内で何かの錯覚が暴れ、全身から不明のつぶやきがムワツと出てくる。

あなたがそのいちいちを、ツイッター（X）に投稿するかどうかは別としてだ。

ともあれ、勝手に仮説を立てて述べたが、これは本当に仮説でしかなく、わたしの疑問、わたしにとってのナゾは初めから変わらず残されている。

ボカロPと呼ばれる人たちはどんな音楽を聴いてきたのだろう。  
誰か詳しい人がいたらマジで教えてほしい。

「ボカロPと呼ばれる人たちはどんな音楽を聴いてきたのだろう」

## A B トンネル

A B トンネルは、A 地点を入口にし、B 地点を出口にしている。  
つまり、A から入り、進んでいくと、やがて B から出るのだ。  
A はトンネルで B とつながっている。

うわあ、当たり前だな……  
もちろん B から入って進んでゆけば、こんどは A から出てくる。  
トンネルだ。

世界中でこれほど無駄な描写もあるまい。

トンネルは長く、曲がりくねっているので、A 地点から出口の B 地点は  
見えない。

それでも、A はトンネルで B とつながっているのだが、「つながっている  
なあ」と観測できる必要があるだろうか。

観測しなくても、A から入ったものは B に出てくるだろう。

犬でも猫でも、オニヤンマでも、A から入ったものは B に出てくる。  
つながっているからだ。

A から B につながっているというのは、ただのトンネルの「性質」であ  
って、そのことに気合は要らないし、観測も必要ない。

「つながっていたのだ！」

と興奮して唄い出す必要もない。

「オレは……A 地点からトンネルに入り、B 地点に、到達するんだ……き  
つとそうなるよう、みんな祈っていてくれ」

みたいな決めゼリフも必要ない。

トンネルによって A 地点は B 地点につながっている。

そのことを、確かめないと、A から B へは行けないだろうか。

そんなことはない。むしろどれだけ拒絶しようとしても、A 地点からト  
ンネルを進んだ者は、強制的に B 地点へと連れて行かれてしまう。

目を閉じていてもB地点に行くし、マッピングしなくてもB地点に行く。

われわれが「行く」のではなく、ただのトンネルの性質だ。

信じる者は救われる、というけれど、信じていなくても、トンネルはやがてB地点に出る。

この場合、もし信じるというなら、トンネルじたいを信じて、トンネルに入るということになるだろう。

トンネルがB地点につながっている、ということ、アテにはしていない。

アテにしないでトンネルは出口に到るし、アテにすることは、そもそも疑っているということだ。

アテにするというのは、「確からしさ」を補強すること他にない。

根本的に疑っているから確からしさの補強が必要になるのだ。

何千人、何万人、そして著名人も国家公務員も、トンネルによってAからBにつながっていると発言している。それらの発言を観測することはできる。

「じゃあ、たぶん本当なんだろうな、よしAからトンネルに入ってBに行こう」

そのように、確からしさをじゅうぶん補強し、その確からしさを根拠にするというのが、アテにすることだ。

これだけ確からしいのだから、きつとそうなのだろう。アテにできる。

そういうものに限って、ウソだったりするんだよなあ。

そのトンネルはじつはC地点につながっていたりする。

あるいは、トンネルが途中で閉塞していたり、トンネルが途中でぐるぐる循環していたりする。

ひでえウソだ。

それがウソだと、彼らは知っていたから、トンネルに入らずに、手前であつていたわけだ。

いまさら狡猾さに気づいて腹が立つが、もう遅い。

A Bトンネルによって、AはBにつながっている。

トンネルに感謝しても出口は変わらない。

ではトンネルに対してどうすればいいか。

トンネルがあるなら利用させてもらうだけだ。

なぜ、AからBにつながっているのかは知らないが、つながっていて、すごい。

すごいということは、それが偉大だということであって、それ以上のことを、われわれは持ちようがない。

われわれが自動車を運転し、トンネルを走り抜けていくとき、トンネルに向けて、

「がんばれ、がんばれ」

と応援したり、対話したりはしない。

いつもどおりの車中を過ごしていればよいのであって、トンネルがどこかへ通じているというのは、ただのトンネルの「性質」だ。

トンネルに関心がおありで？

そんな気持ち悪い奴はいない。

「すごい！ あなたは、どうやってそのB地点に立っているの」

「すごいと言われても。ただトンネルが、A地点からB地点へつながっていたように」

「へー そうなんだ。すごいなあ。わたしも、やってみようかなあ」

「やってみる、というのは、ヘンな言い方ですね」

そういう人は、じつさいにはA地点にこない。

この人は、B地点に行きたいのだから、A地点には来ない。

こういう人はたいいてい、B地点に「行く」ということがやりたいのだ。

トンネルを抜けてB地点に到ってしまつては、それは「ただのトンネルじゃん」ということにしかない。

それでは、自負も満たされないので、

「わたしは、どこまでもあきらめず、B地点に向けて進んでゆきます。いつか、到達するんです」

ということをしたいのだ。

そういう方法もたしかにある。

あるのかもしれない、おれにはわからない。

ただ、おれには無理だ。

おれにはそんな根性はない。

自負を満たしたいという衝動がない。

おれには、みずからで山を越え谷をわたり、B地点へ到るなんていうことが、まるで不可能に思える。

無理だよーと思いつつ、うろろろしている。

何かないのかな、と思いつつ。

そのじつ、

「いや、何かあるだろ」

と直観している。

「早よ、出てこい」

(こんなのもう、請求しているに等しいよなあ)

それで、気がつくとも目の前にトンネルがあるので、

「なるほど、これかあ」

と思う。

いまさら若干ビビりはするけれど、

「まあでも、これだわ」

おれはトンネルに入り、進んでいく。

トンネルを進めばただB地点に出る。

おれはトンネルを出て、空を見上げ、ぐあーと背伸びをし、

「ふう、やれやれ。いけたわ」

と大きな一息をつく。

無事、狙っていたとおり、B地点に来られたわ。

もう慌てることはないの、おれはそのへんの岩に腰掛ける。

そこに、トンネルの主が現れて、

「このトンネルはワシが掘ったんじゃないか」

と言う。

おれはそれに対し、

「あつそれは、どうもどうも」

と言う。

自動的に頭が下がる(そりゃそうだ)。

すげえ人だ。

ご自身が踏破するのみならず、後続のアホたちのためにトンネルまで掘

つてくださるとは……

これはもうモノが違う。

とはいえ、なぜかわたしがここから素直に口にするのは、

「いやあ、こんなトンネル掘っておいてくれたら、そりゃ僕みたいなモンが勝手に使いますよ。うへっへっへ。いやアほんとすいません、勝手に使わせてもらいました。助かったっす」

トンネルの主は、

「うん……まあ、そういう奴のために、掘ったものではあるので、いいよ」

「うっす。とてつもない広いおこころ、マジであります」

「ところで、こんなトンネルに、よく何も考えずに突っ込んだなあ。どこ

につながっているかもわからないに」

「いやあ、これはもう、B地点に行くでしょ。いや正直、その先がB地点なのかどうなのかはわからなかったですけど。そもそもB地点のこと僕はよく知らないんで……ただ、誰かがわざわざ自分のような奴のために掘ってくれたものってのはわかりますから。それじゃあ、これはもうすばらしいところへ出るぞと。それぐらいはわかりますからね」

「ま、冷静に考えたらそうか」

「そうっすよ。もしこれが、C地点へのいざないというか、そういうワナだったら、もつときらびやかに、B地点への楽々ルートはこちら、みたいなこと書いてありますよ。もつとそれっぽくするでしょ」

「たしかにな。ワナならそう宣伝するわ。じゃあ、そこんところを読み取れたお前の勝ちってことか」

「偉そうに言わせてもらおうなら、それはそうです。僕はそういう、ホンマモンの人を見抜き、ホンマモンの人に乗っかって世話になるの得意なん

で」

「たしかに、そういう抜け目のない感じというか、ずうずうしい感じ出てるわ」

「出ていますよね」

「何なん、なんでそんなニヤニヤしてんの」

「いやあ、そんなのもう……ねえ。わかるんですよ。あなたみたいな人は、信じがたいことに、アホたちがB地点までたどり着けないということを気にかけてしまうんですよ。他人事なのに」

「うるせえよ」

「まるで自分のことみたいに、あるいは自分のこと以上に、ずっと気にかけてくれるんですよね。それで、こっそりトンネルまで掘っちゃう。このトンネルを掘るのがどれだけ大変だったことか。でも、そんなこと忘れちゃって、このトンネルを自分が掘り抜いたということより、このトンネルを使って誰かが来た、B地点までやって来られた、ということばかりやるんじゃないよ」

「そんな、さすがにそこまで肩入れしてねえわ」

「いえ、あなたはそういう人です。信じがたいですけど、あなたは本当に根っからそういう人ですよ。あるいはいつからか、あなたは本当にそういう人になっちゃったんでしょう」

「ちっ、じゃあもうそれでいいよ」

「なので、おこころに沿うかと思ひ、堂々とあつかましく、勝手に使わせてもらいました」

「はいはい、そりゃ良うござんした。ところでさあ、このトンネルって他にも誰か来るかな？」

「来る人は来るんじゃないですか？ 疑りぶかい人はけつきよく来ないでしょうけど、まれに能天気な人が、やっぱりホイホイやってきておかしくないですよ」

「まあ、疑りぶかい奴に來られても困るし、それぐらいでちょうどいいかもな」

「そうっすね」

トンネルによってA地点はB地点につながっている。

Aから進んだものはBへ到るのだ、それがネズミであっても。

ネズミは感謝なんかしない。感謝なんて高度な精神挙動をネズミに求めるのは酷だろう。

ただネズミだって、B地点に到ったとき、何かを感じて、

「チュー、チューチューチュー！」

と跳ねまわりはするかもしれない。

どう言ったらいいかわからない。そりゃネズミだからな。

だからといって、トンネルの主がそのネズミを踏み殺すわけではない。

「おや、ネズミさんも来たわ」

「あ、ホントっすねえ」

「チュー」

案外、ネズミも感謝ぐらいはするのかもしれない。

人間もうかうかしていられないぜ。

あなたはA Bトンネルなんて渡らなくてよろしい。

シラップ！ おれはあなたの行方不明を阻止しているのだ。

「自分もトンネルの向こうに行きたいです」

あなたは必死だ。

おれはこう答えよう、

「いや、自分はいかなくていい」

「えーっ、わたしだけ除（の）け者ですか。わたしだけ追放ですか。あーあ、わたしだけ崖から突き落とされるんですか。えーっ、えーっ」

「うるせえ、アホめ。お前はいつたい何億回そのあやまちを繰り返すんだ」

「だって」

「うるせえ。自分はトンネルなんか行かなくていいの」

どこかの誰かが言っていたではないか、^^錯覚こそ自分だVVと。

自分がトンネルを渡れば錯覚だ。

錯覚、つまり、そのトンネルはレプリカだ。

A地点もB地点も模造品で、トンネルが同じサイズで作られていても、

レプリカだ。

そんなレプリカのトンネルをくぐってどうする。

「わーい、B地点（模造品）だあ」

ということになる。

まるきりアホじゃないか。

じゃあ、何をどうすればいい。

自分がそのトンネルを渡らなければいい。

トンネルによってAはBまでつながっている。

なんであれ、Aから入ったものはBへ到る。

それはトンネルの性質だ。

それであなたは、

「自分もAから入りたいです」

と言う。

それについておれは、

「だから、自分というのは錯覚なんだって」

と答える。

そもそもさ……

なぜ、「自分」がABトンネルをわたらねばならないのか。

「何か」がABトンネルをわたるだけでいいじゃん。

「何か」がトンネルをわたるだけでは何にもならないか。

本当にそうかな？

「自分」が参加していないと世界にはひとつもお祭りがいないか。

「自分」が観測していないとホッキョクグマはあくびをしたり眠ったりしないのか。

観測することで、人は「確からしさ」を得る。

観測を重ねることで、「確からしさ」が補強されていく。アテにできる。

そして、十全な観測を得たとき、あなたはついに「確信」を持つ。

錯覚だけが確信とか、誰かが言っていたっけ。

それにくらべて、観測しないものは「不確か」だ。

では、不確かなものは「存在していない」のか。

そうともかぎらない。

むしろ逆に、

^^不確かなものこそ存在、確信こそ錯覚VV

ということもありうる。

あなたは自分の存在を確信している。

デカルトでさえ、「うああああ、我、在リイ、やべーっす」と確信した。

デカルトは懐疑主義の果てに、確信できることは「我が在るということだけ」と結論づけた。

デカルトはバカではない。

ただ、あんまり意味がなかったというだけだ。

デカルトはバカではないので、デカルトにABトンネルをわたるように

促すと、

「いや、このABトンネルは錯覚かもしれん」

と言い出して立ち止まるだろう。

賢い。

デカルトはおれと話したら頭を抱えて混乱するだろう。

「おれっち、デカルトって言うんだけど。あのさあ、ABトンネルも、錯

覚かもしれんよね」

「そりゃそうです。観測はできますけど」

「そう。観測できるけど、その観測が錯覚かもしれんって、疑えるもん

ね」

「そうっすね。デカルトさんの言うとおりっす。だからおれは、ABトン

ネルを観測なんてしませんけど」

「観測しないと言っても、そこを歩いたら、どうしても観測しちゃうじゃ

ん」

「そうっすね。自分が歩けばたしかにそうですよ。でも自分が歩かなきゃ

いいじゃないですか」

「自分が歩かなかつたら何がABトンネルを歩くんだよ」

「何かが歩くんでしょうな」

「何か？」

「何かです」

「何か、がA Bトンネルをわたるのか」

「そうです、何か、がわたるんですよ」

「なんなんだそれ」

「なんなんだと言われても、そりゃトンネルですよ。トンネルの性質。AからBにつながつとるんです」

「何かがトンネルをわたると言われても、そんなの不確かすぎるだろう」

「そうですよ、不確かですよ」

「不確かだと疑えちゃうじゃん」

「疑えばいいじゃないですか。疑っても、A Bトンネルは存在していますし、その性質が変わるわけでもないんですから、誰も困りませんよ」

「不確かだと、そのトンネルが存在するとは言えないじゃないか」

「何を言つとるんです、あんたさっき、観測は錯覚だって自分で言つたじゃないですか」

「あ、そっか。ん？ いや待て、どういうことだよ」

「観測が錯覚なら、未観測が存在でしょう。じゃあA Bトンネルは『何か』がわたるってことでいいじゃないですか」

「未観測が存在？ んん、なんか混乱してきたぞ」

「あなた、自説で混乱しないでくださいよ。あなたは、『我在り』が代名詞じゃないですか」

「そうだけど」

「あなたが言う我在りってのは、つまりこういうことでしょう。観測なんでものはどこまでも疑わしいものだけれど、その疑わしい観測ってやつをしてしまう以上、その『観測手』たる我は存在するって言っているだけじゃないですか」

「ああ、そうだそうだ。そのとおりだ、思い出した」

「懷疑主義をやっているおれ、疑い尽くすおれ、そういうのをやっている以上、疑い手である『おれ』だけはどうしても存在しちゃうってことですよ。で、そういうおれが存在するというのを、観測することはできないんですよ」

「そうなの？」

「そうなの、って、なんであなたが訊くですか。あなたは自分のこと観測しても、その観測は疑いうるってどうせ脊髄反射で言うじゃないですか」

「なんかもう昔のことだから忘れちゃったんだよ」

「あなたもいいかげんな人ですねえ。あなたは、我思うゆえに我在りとか言って、思うという主体の『我』の存在だけは演繹的に証明できる、それだけは疑えないって言つたんじゃないですか」

「あー、なんか、そういうの懐かしいなあ。いま何か、胸にグツとこみあげるものがあつた」

「そりゃけつこうなことで。懷疑主義が懐古主義になつちゃってますけどね」

「おつ、うまいこと言うじゃねえか」

「へいへい、じゃあ座布団でもくださいな。とにかくあなたが言つたことはこうでしょう。全観測は全疑い。だから全錯覚と前提すべしと。そう言つたわけじゃないですか。その上で、その錯覚をする主体だけは存在すると言つたわけでしょう。じゃあ、^^錯覚こそが自分Vというところで合っているじゃないですか。で、あなたは言ってみれば、どこまでも疑うという方法で、その錯覚ってやつを突っぱねたってことでしょう」

「なるほど、たしかにそのとおり。何もかも錯覚かもしれんもんなあ、それを突っぱねるってのは、たしかに疑いつづけるってことだわ」

「でしょ。そこで、A Bトンネルですけど。さっきから言うように、そもそも自分がわたるわけではなし、A Bトンネルじたいも観測しようつてものではないのに、それをどうやって疑うんですか。観測しないものをどうやって錯覚するんです。仮に宇宙の端っこでいまチューリップが咲きました〜といって、観測するアテのないそれをどうやって疑うんですか」

「えー、なんかさあ。それだと、そんなチューリップ存在していないじゃん、って言いにくくなるんだけど」

「そりゃそうでしょう。それはあなたが、大前提、存在を観測して確かめようとしているからですよ。宇宙の果てにチューリップが咲くのをじろじろ見て、入念に確かめる、よーし確かめた。それでいて、あなたはなお

『いいや疑いうる』って言うんでしょう。『観測したいが錯覚かもしれんからね』って」

「それはたしかに言いそう。いかにもおれっぽい」

「だから矛盾していますね。確からしさを高める行為が観測ですけど、その観測という行為が疑いが疑いうるって言うんですから、そりゃどこまでいっても疑いにしかりません」

「なんか、話がむつかしすぎてアレなんだけど、じゃあ錯覚とはつまり何なんだろう」

「あなたの知っているとおり、錯覚は疑うことの反対ですよ」

「あれ？ 疑うことの反対は信じるってことじゃないの？」

「違います。疑うことの反対は確信です」

「確信って……ホラそれって、信じるって字がついているじゃない」

「他にあてはまる熟語がないので、やむをえず語感で言っています。そもそも確信って熟語じたいがヘンなんです」

「熟語がヘン？」

「はい。だって、確かなものに対しては、信じるなんてことは必要ないじゃないですか。それこそ、あなたは我在りを言った。疑う余地がないと言った。疑う余地がないならこれ以上確かなことはない。で、あなたはその我在りというのを、わざわざ「信じている」ってわけじゃないでしょう。

そこまで確かなことなら信じるなんて必要はないんですから」

「それはたしかにそうだわ。いちおうおれ、そこんとこ専門だからスゲーわかる。信じる必要はないわ」

「でしよ。信じるってのはそもそも不確かなものに向けるもんです。確かなものに向けてどうしますか。A Bトンネルは不確かに存在していて、それを不確かな何かがわたるんです。そういう話をしている。これを確信するのも疑うのも「お門違い」ってものですよ」

「ひえええ、そんな、そもそも確かめる余地がないものを、存在として扱うなんて、ちょっと感覚的に意味不明だわ」

「あなたねえ、そんなこと言っていてどうします。確かめる余地のないトンネルが存在していて、確かめる余地のないあなたも存在していて、その

不確かなあなたがトンネルの世話になっていたらどうするつもりなんです」

「ひえええ」

「不確かだから扱えないなんてのは論外です、不確かなものしか扱えないって言うぐらいになってくださいよ」

「ひえええ」

A BトンネルによってA地点からB地点へはつながっている。

それはトンネルの性質だ。

おれはA Bトンネルの話をしている。

おれは自分の話はしていない。

あなたはA Bトンネルを確かめたいか。

ふーん、そうか。

おれは、確かめなくていいなあ。

「A Bトンネル」

# 性的野心

わたしはいまも作品の中にいて……

根こそぎふざけているのだ。

書物（しょもつ）？

世の中のみんなはもつとシリアスだ。

おれはふざけている。

向きが逆だ。

おれはずっと昔から、世の中とは向きが逆だったのかもしれない。

ことさら世の中に逆らおうとしていたわけではない。

ただおれにとってはこっちが順だったのだ。わざわざ逆を気取ったわけではない。

書かれるべき文章など存在しない。

書かれるべき文章は、たとえばいま芸能界のスキヤンダルがエヘンゲフングホゲホダが、それについておれの回答は、ダブルきゅうり鼻の穴タンポナーデーとなる。

ふざけているわけではない（ふざけている）。

ふざけてこんなことを言っているのではなく、マジでこっちが「順」なのだ。

もちろんわかってもらおうとは思わない。

ただおれ自身、マジだ、ということに気づいたのだ。

書かれるべき書物は存在しない。

だからおれはこうやってのびのび書いている。

ふつう、書かれるべき書物がなかったら、書かねえわな。

おれはその逆だ。

書かれるべき書物を書こうとすると、ぐはあつ、と緑色のバブルを吐いてくたばってしまう。

性的野心の話をしよう。

こうして話をまぜこぜにするのは、文章の書き方として最もヘタクソであり、やっではならないNG行為だ。

読みにくいと思ったらありやしない。

するする読めよ！

婚活に血眼（ちまなこ）になっている女性は（男性も同じだが）、まず、自分が誰からも愛されないという可能性を、通常にありうることとして大前提にしないでほしい。

だって、そりゃまあ、いまのところ自分を愛してくれる誰かがいないから、アプリに参入しようとしているのだろう。

ということとは、アプリに参入したところで、きゆうに自分が愛されるようになり、ロマンスの神様に庇護を受けて、ゴーゴーヘブンになるでしょうと、そんなことを前提にするのは見立てとしてヘンだ。

一生、誰からも愛されないという人はごろごろいる。

あなたがマッチングアプリで見かける登録者の大半について思うことだ、何の不自然もない。

それをいちいち、ショックだとか絶望だとか、おおげさに捉えすぎなのだ。

まるで、書かれるべき書物があると思い、それが書けないと苦しむというハズレ執筆者のようなことをしている。

誰にも愛されない、と苦しんでいる、そのことに絶望している「溜まり」が、マッチングアプリの最下層にあるだろう。

なぜあなたはそんなところにみずから足を突っ込むのだ。

（マッチングアプリのことではなく、その「溜まり」のことな）

生きていて、ついに誰からも愛されなかった、ということとは当たり前前にありうる。

そんなしょーもないことを恐れるな。

大前提にしておけ。

おれが自分の顔写真をマッチングアプリに貼り付けて、「楽しく愉快なタイプです！」とプロフィールを書いたとして、誰かがおれのことを愛して

くれると思うか？

マッチングアプリに登録している何十万人もの女性はおれの母親ではない。

いや、仮に母親であつたとしても、マッチングアプリに登録しているおれの顔写真とプロフィールなどは、母親でさえ愛さないだろう。

どう思う？（死ぬほどヘタクソな文章）

おれがあなたに詰め寄り、

「あなたもボクのことを愛さないんですね、ボクはショックだし絶望です」

と涙ぐんで言う。

なんなんだコイツは、マッチングとかそういうことの次元じゃない、と

あなたは思うはずだ。

仮にあなたが、おれに向けて、

「わたしはあなたのことを愛しません」

と言ったとする。

それについておれが、

「それでいいじゃん」

と言おう。

一ナノグラムの嘆きも動揺もなしにだ。

「生涯、誰にも愛されなかったとして、それはたぶんおれが悪いわけで、

そんなことで世を呪う理由になりますか。春に桜が咲くのは別段わたしを

愛してのことではないけれども、桜吹雪の花道はわたしを邪険にするわけ

ではなく、景色をわたしにもあなたにも等しく恵んでくれるではありませ

んか」

そうきつぱり言うようなら、あなたは少なくともわたしのことを、

「割とまともな人だった」

とは思ってくれるだろう。

それでじゅうぶんじゃないのか？

背の高い、デキる彼がいて、笑顔がステキだ。運動神経も良くて、いま

活躍している真っ最中で、これからさらに大物になっていくに違いない、

そういうカレがいる。

「わたし、彼のこと本当に好きかも」

とあなたは思う。

それはただの性的野心だ。

恋愛じゃない。

いや、現代ではそちらのほうが恋愛「らしさ」があるのだけれども。

有料チャンネルでやっている恋愛リアリティショーは、すべて性的野心

の展示会だ。

性的野心は悪くないよ。

おれだってこのあいだ、デカイ黒塗りのセンチュリーを、若い美女が運転しているのを見た。

髪の毛の長さや、来ているワンピース、露出している肌、鼻にかかっている

サンングラス、何もかもが高級だった。

高級なのだ。

近くに寄ることができたなら、どんなにいい香りがするだろう。

強いときめきが起るが、これはただの性的野心だ。

いくらステキに見えたからといって、いきなりその女性が自分の大切な

ものになるわけではない。

激しく好きにはなるし、とてつもなく欲しくはなるが、いきなり大切な

ものにはならない。

彼女の、二十万円するハイヒールが折れることより、おれの使っている

三千円のマウスが壊れるほうが悲しい。

当たり前だ。

性的野心と、愛は、しばしば混在している。

性的野心を言い張る奴にかぎって、バレないようにこっそり愛を持って

いたりするし、愛と言いつつも、性的野心百パーセントでしか

なかったりする。

性的野心が悪いわけではない。

違うラベルを貼るのがよくないだけだ。

婚活者が、

「今回の彼は、わたしちょっと真剣に向き合えるかも」

と言いつ、ウェディングドレスへのプロセスを真剣にイメージしているのは、残念ながらただの性的野心でしかなく、愛ではない。

もちろん、彼が体調を崩して入院したり、怪我をして包帯を巻いたりしたら、気の毒に思うし心配もするのだ。

だけど、それでただちに「大切なもの」ということにはならない。

多くの人はきつと、本当には「大切なもの」とか、「かけがえのないもの」とかをわからずのまま生きていく。

せいぜい家族のことをイメージするだけだ。

無理に「大切なもの」を言い張らなくていいのに……  
恐れるな。

生涯、誰にも愛されないとか、「大切なもの」や「かけがえのないもの」がよくわかっていないとかいうことは、じつにありふれたことであつて、そんなにショックを受けるようなことではない。

そのへんを歩いているオッサンやオバハンはみんなそういうものだと思うえ。

あなたもそれと同じだ。そういえば、あなたはなにも珍しい奴ではないなるだろう。

性的野心しかない、言われてみたらそのとおりだということがあつたとして、そのことでしょ返って酒浸りになる、という必要はない。

だいたいみんなそんな感じじゃないか、何も珍しいことではない。

フツウのことだ。

かといつて、居直るようなことでもないのだろうけれどね。

アイドルオタクが、「握手会に通いつめていたら、百万分の一でも、ひとつとしたら」という空想をするのは、やはり性的野心であつて愛ではない。

思春期の少女が、さしあたり少女マンガに出てくる無理やりのイケメンに恋するのも、性的野心であつて愛ではない。

人は、素敵なことになりたいのだ。

どうしてもまず、「自分が」素敵なことになりたい。

自分が素敵なことになりたくて、その手がかりというか、端緒や可能性を掴むと、そのことに血眼（ちまなこ）になつて、

「カレのことで頭がいっぱいなんです。わたし、こんなに人のことを好きになつたの初めて」

と言いだす。

それは残念ながらただの自己愛だ。

自分が素敵なことになる、という可能性から、自己愛の願望に火がつき、カチカチ山のたぬきみたいに走り回ることになつただけだ。

意地悪で言っているのではない。

あなたが眼球バキバキのおばけにならないように知識を与えているのだ。

（ひでえ言いようだな）

自分が素敵なことになりたい、という、隠れた強い衝動がある。

自己愛の衝動だ。

自己愛の衝動は、ダサイので、なるべく剥き出しにはせず、「モチベーション」とか「好き!」とかの麗句でコーティングする。

そうして、コーティングして隠蔽したまま、裏側でうまいことやつて、何か自己愛を充足する「大物」を一発ゲットできないものか? と、必死で画策する、そういうはたらきのことを「野心」という。

それは、誰かを愛するというのではないし、自分が誰から愛されるということにも無関係だ。

誰を愛することもなく、誰からも愛されることがなかったとしたらどうしよう。

おれは、自分が誰からも愛されなくなつたら、ひたすらプレイステーションのゲームをやるだろう。

誰からも愛されないメンズたちがそうしているであろうように、おれもきつとそうするだろう。

ただおれは、自分が誰からも愛されないということに対して怯まない。プレイステーションと心中するというのはそんなに悪くない人生だ。

せめてそれぐらいの開眼を得て、こころの底から笑えるようでない

逆に誰からも愛されようがないじゃないか。

大切なものと性的野心を混同してはならない。

性的野心と自己愛の発火を、「好きなんです」というごまかしですり替えてはならない。

その取り違えが許されるのは十一歳までだ。

繰り返す、十一歳までだ。

十二歳以降は、どこからともなくムエタイの選手がやってきて、あなたの顔面に飛び膝蹴りを入れるので、そのつもりで注意していなくてはならない。

人は、生きているうち、誰からも愛されないかもしれない。

そんなこと、近所のおっさんやおばさんを見ていたら誰でもわかるだろう。

結婚したからといって、夫と妻が愛し合うわけではまったくないし、お互いに大切なものになるというわけではまったくない。

極端な不具合でも抱えていないかぎり、人はただ結婚するというだけならたぶん結婚はできるのだろうが、そのことは、自分が誰からも愛されないということの救済にはならないし、ただ結婚するだけでは性的野心の実現にもならない。

また、若く尖っているスケベレディがいたとして、そういうレディに男どもは寄ってくるだろうが、それだって男どもが性的野心で寄ってきているだけであって、けつきよくこうしたスケベレディが一生誰からも愛されないということはごく当たり前にある。

そうやって、ずっと男どもに言い寄られながら、誰にも愛されなかったという女性はいるし、あるいは金持ちの男なども、ずっと女性に言い寄られながら、けつきよく一生誰からも愛されないということが当たり前にある。

ここで大切なのは、順と逆だ。

生涯、誰からも愛されないかもしれない、その可能性は誰にとっても同じだ。

それをいちいちショックに感じ、絶望するというのが、逆だと言っ

ているのだ。

そんなことの何がいちいちショックなんだ？

誰からも愛されないということは、ありふれている何でもないことだ。それが順なのだが、おれの言っていることは、きつと世間の大勢から見たら「逆」なのだろう。

書かれるべき書物は存在しない、だからおれはのびのびと書いている。それに引き当て言うなら、おれは、愛されるべきなんて前提は存在しない、と言っていることになる。

だからこそ、おれはこうやって、のびのびと愛されているのかもしれないなあ。

おれの知り合いの、架空というよりもはやただのウソでしかない存在、

八方田マキャベリ聡子さんは、

(あまりにもひどい名前だ、こんな奴いるわけねえよ)

ハンググライダーに使う頒布を製造販売する会社に勤めているが、今年になって入ってきた新人女性に腹を立てている。

その新人女性は、ぶりっ子をして、アイドルっぽい声や仕草をちりばめ、またおっぱいが大きいものだから、それを女の武器として、同僚の男たちに取り入っているのだ。

新人女性は、無防備でスキだらけの女の子というふうを演出し、無垢・清楚ふうを振るまって、男たちに「守ってあげないと」と思わせ、自分を囲わしている。

それによって自分の立ち位置を万事において有利にしようというのだ。

「そういうのが、見ていて腹立つというか、それ以前にキモい。キモすぎて無理。でまた、そんな馬鹿馬鹿しいものに、男連中がホイホイ乗っかっていくのを見ていてイヤすぎる」

八方田マキャベリ聡子はそう述懐する。

聡子は、何をそんなに嫌悪しているかというと、そのアイドルっぽい新人女性、海江田フルバンジーなまこの主題が、自分と同じ性的野心だということに嫌悪を湧かせているのだ。

名前がバカバカしすぎて、話が入ってこねえなあ。

こんな名前の女の子が囲われたりしねえよ……

聡子のほうは、意欲も高く、前向きで強気で、そこそこデキる女として自分を誇示しながら、女性としてはギャップのある気さくさで男に親しく身を寄せ、男に「あれっ、いけるかも」と思わせるのを手口にしている。

一方、なまこは守ってやらないといけない無垢な女として男に身を寄せ、誰にでも「頼りにしています」という上目遣いを向け、男に「あれっ、いけるかも」と思わせるのを手口にしている。

なお男どもが「いけるかも」と感じて発火するというのも、男どもの性的野心にすぎないのであって、愛がどうこうということにはならない。

ともあれ、聡子となまこは共に、そうして性的野心を主題にして生きていくのだ。

だから、お互いの存在が気に障る。

まるで、自分の主題が、けっきょく女の武器を駆使しての、性的野心の実現にすぎず、本当には自分で何かをするつもりがないということを、浮き彫りにされているように感じるのだ。

だから腹が立つ。

ひよっとしたら、お互いに内心で見比べて、お互いに「あれよりはマシ」と思っているのかもしれない。

そりゃヘイト感情も特盛になるというものだ。

背の高い、デキる男の彼がいる。

彼は、車が好きで、その趣味についてはちょっとマニアックだ。

その趣味について、聡子は「理解のある女性」として振る舞おうとする。

なまこは、「えー、教えてほしいです」というスタイルで振る舞おうとする。

そりゃ、お互いのことが透けて見えて、腹が立つわな。

そんなアホみたいなことをしていないで、たかが趣味というなら、せめて自分が根こそぎ好きな趣味を自分自身で持ったらどうだい、とお互いと思う。

お互いと思うし、お互い自分自身についても思うのだ。

性的野心しかないのか、と。

性的野心……けっきょく、誰かにぶらさがって、自分をなんとかしてもらおうと思っている。

まるでそのことを、自分の夢のように語ったり描いたりするが、それはどうやら本当にただの性的野心のようだ。

野心、つまり、「一発当てりゃあ、自分も勝ち組ってもんよ」ということ。

特別にデキるイケメンを、一発ゲットすりゃあ、それで自分は勝ち組ってもんよ、というようなことを考えている。

だから、彼のことを大切に思っているというようなことは、本当はないわけだ。

誰かのことを大切に思うなんてことは、むしろ人が生きていくうちに例外中の例外として起こることであって、そんな特別なことを、自分にとつて当たり前に降り注いでくるものと思っただけじゃない。

性的野心なんてものは子供のうちにさえ発生する。

小学校三年生の男の子が、身体的に発育して、運動会でリレー競技を走ってみたら、思いがけず速くて優勝した。

先行する走者たちをごぼう抜きにして、それはそれは、運動場全体はいっせいに盛り上がったのだった。

彼はヒーローになった。

同級生の女の子は、これまで彼のことに注目していなかったけれど、そのときから、

「わたしは、〇〇くんのことを、いちばんわかってあげられる人になりたい」

と思ったりする。

「〇〇くんが走るのを見て、わたしすごい彼のこと尊敬したのね」みたいなことを日記に書くかもしれない。

でもそれで、〇〇くんのことを大切に思っているわけではない。ヒーローにくつつきたいだけだ。

アイドルにくつつきたいオタクの空想と同じ。

残念ながらただの性的野心でしかない。

若さにあふれ（本当はそんなに若くなかったりするが）、エロくて派手な服に身を包み、舞台上でライトを浴び、性的な自分を堂々と示し、声を出して唄ったり、飛んだり跳ねたりしてダンスする、特別な会場で乱痴氣のサウンドと音量、そしてメンバー同士で抱き合ったりはしゃいだりするという、これまでの自分ができなかったことのすべてを、きらびやかにやっているアイドルの女の子がいて、自分もそれにくつつくことで、結果的に自分もそれを手に入れたということにしたいだけだ。

彼女のことが大切なのではなくて、自分が華やかな人生を歩んだということにしたいだけ。

性的野心だ。

おれは、性的接触一発で、黒塗りのセクチューリー車と美女とのセックスと、すべての高級・高額な世界に、しれっと住み込みたいのだろうか？  
自分がセックス一発で「上等」なやつになれるかもしれない。

人はそのことに駆り立てられるが、それはあさましき野心であって夢ではない。

人には野心というものがあるのだ。

あなたがノーベル賞を獲ることを想像してみたまえ。

想像したか、イメージしたか。

あなたの想像したノーベル賞というのは、ノーベル賞の授賞式だ。

スポットライトを浴び、トロフィーを授与されて、満座の壇上でコメントを求められ、拍手を受けており、世界的に有名になるという自分だ。

ノーベル賞を獲るとイメージしたとき、まさか、二十五年もひたすら実験室にこもり、何千枚ものレポートを積み上げ、徹夜でフラフラになりながら、ひとり研究を続けているなんてことはイメージしない。

ノーベル賞を獲るのって、本来そういうことだと思うけれどね。

あなたが女優になったときのことを想像すると、あなたはもう、カンヌ映画祭の授賞式に立っているのだ。

夜な夜な台本を覚えようとして覚えきれず泣きそうになったり、バレエのレッスンで爪先が割れそうに傷んだり、役作りのためにあと八キロ痩せ

なくてはならなかったり、そこまでしたのに降板させられて代役に座を奪われたり、生活費とレッスン代のために時給の安いアルバイトでコキ使われたりと、そんなことをイメージはしない。

女優になるというのは、本来そういうことだと思うけれど。

あなたは、自分が何かをやりたいという主体性なんか持っていないくて、野心だけを持っているのだ。

一発当ってノーベル賞を獲り、一発当って主演女優賞を獲りたいと思っている。

実験室にこもって研究がしたいわけではないし、台本を握りしめて役作りに演技がしたいわけでもない。

それと同じで、あなたは、彼のことを大切に思っているわけではなくて、ただ一発当って、デキるイケメンを獲りたいと思っただけだ。

性的野心においては、その「一発」というやつが、じっさいにあるかもしれない。可能性はそこそこリアルにある。そういう感じがする。

それで駆り立てられる。

「いけるかも」と感じ、いつのまにか、それは自分にとって既定路線になっている。

ただそれだけのことだが、現代ではそちらのほうがむしろ「恋愛らしさ」がある。

そんなおれの主題じゃないから細かく書かないけど……

八方田マキャベリ聡子は、背の高いデキる彼のことを意中にしながら、いつぼうでは情性的に、枯柳揺男と酒を飲んでいる。

これまたひどい名前だ、こんなやつ存在しねえって。

枯柳揺男は会社の同期で、ついに出身大学も同じだ。

聡子は枯柳揺男に言い寄られている。

付き合ってくれとか何とか言っているが、

「要するにわたしとやりたいんでしょ」

と聡子は見抜いている。

「まあ、こんだけ言い寄ってくるからには、わたしのこと好きなのはたぶん本当に好きなんだろうけど……」

八方田マキャベリ聡子は、枯柳揺男と酒を飲んでると調子がいい。ウマが合うというか、飲み友達としては正直悪くないと思っている。

なぜウマが合うのか。

それは、枯柳揺男もまた、性的野心で挙動しているからだ。

要するに、そこそこイイ女といえる聡子をモノにすることで、自分の性的な実績を増やしたいと思っている。

何であれば、それで自信を回復したいとも思うし、そのことを、これから進んでいくことの弾みにしたい。

けっきょくのところ聡子は、お目当ての男とうまくいっていないので、さびしがつており、そのところをうまく突いていけば、

「いつか落ちんでしょ」

と枯柳揺男は思っている。

聡子はそれについて、

「ぜったいそんなつもりない。別に、そこまでそれがイヤっていうわけじゃないけど、なんか思い通りにされたら腹立つし。だからやらせてあげない」

と思っている。

聡子は、枯柳揺男の挙動の仕組みが手に取るようにわかるのだ。

枯柳揺男は、ただ安っぽい性的野心ばかりで挙動しており、聡子はそれを「逆にわかりやすい」と思っている。

そして聡子は、枯柳揺男を見ていると、さすがに内心で見下すところがあり、

「言っちゃ悪いけど、さすがにわたしはコイツよりはマシだわ」

と思えるのだった。

聡子は何もおびやかされずに済む。

それでさらに、枯柳揺男が下手（したて）に出て、ずっと聡子を口説いてくるのは、聡子にとって不快なことではなかった。

だから聡子は、枯柳揺男と酒を飲んでると調子がいいのだった。

聡子は枯柳揺男について「なんでもか居心地だけはいいんだよね」と不思議がっているのだが、仕組みはそういうことだ。

いま、恋愛とされているものの多くは、残念ながらただの性的野心というのがほとんどだ。

大切なものとか、かけがえのないものがそこにあるわけではなく、お互いにただ性的野心を向けあい、そのことを衝動力としている。

そこにこそ、本当に譲れないものが露出し、本当に欲しいものが暴かれ、本当は要らないものが明らかにされると感じる。

むしろそうした性的野心の力こそが、リアルで真に「恋愛らしい」として賛美を受けているほど。

しかし性的野心は、けっきょく愛ではないし、それじたいが大切なものではないため、気づいてしまうと追い詰められるところがある。

八方田マキャベリ聡子も、なぜか唐突に、しばしばという頻度で、

「ああもう、死にたい」

みたいなことを思うのだ。

特に理由はない。

こんな仕組みに生じている理由などを聡子が発見して読み取るとはまづできないし、読み取ったら読みとったでさらにまづいことになってしまうだろう。

大切なもの、かけがえのないものを、得てきていないのに、自分はずっと恋愛をしてきているつもりでいる。

そんなことに気づくとけっこうシヤレにならないぐらいまづいだろう。

八方田マキャベリ聡子は、ひさしぶりに自分が本気になる相手に出会えて、救われたように思っているのだ。

「やっぱり本気で恋をしていないときのわたしってダメだわ」

聡子は自分のことを恋愛体質だと思っている。

まさか、^性的野心に賭けるといふ発想しか持っていないVなんてことは考えもしない。

聡子は現在の自分自身を、わりと「キラキラしている」と思っており、特にいまは「わたし、本当の気持ちで動いている」と思い、そのことに自信を回復しているのだ。

でもこうして、他人事として客観的に眺めていると、きっと八方田マキ

ヤベリ聡子は、自分自身で何か本当のことを為し遂げようとはしていかないのだろうな、と思える。

聡子は、かけがえない友人たちと、かけがえない時間の中を生きていく、ということにはならないのだろうな、とわれわれは予想してしまふ。

おれは、自慢じゃないが、かけがえないものの中を生きてきている。これは逆に堂々と自慢ということにしておこうか。

おれはかけがえないものの中を生きてきている。

おれがこの世に生まれた理由、その価値というものは、もう何十年前にも満了している。

かけがえないものの中をじゅうぶんに生きさせてもらった。

おれが満たされるために必要な体験の、何十倍も、もう与えてもらった。

だからもう隕石が降ってきて死んでしまっても、おれからは何も文句はないのだが、それにしても隕石は降ってこないし、落雷も当たらないので、ぬけぬけと生きており、ぬけぬけと生きさせてもらえているので、ぬけぬけとさらに大切なものにまみれて生きていこうと思っている。

おれはあつかましくて強欲なのだ。

おれは性的野心に、気でも狂ったのか、小説のモチーフを得ようとしたりする。

だからおれは黒塗りのセンチュリーを乗り回していた、どの誰とも知らない美女のことを、勝手にアイツ呼ばわりして愛している。

おれは性的野心に救済を求めなくていい。

ああ、なんてラッキーな奴なのだろうおれは。

男というのはふつう、おじさんになり、おじいさんになっても、性的野心に救済を求め続けなくてはならない生きものなのだ。

こんにちの、「いただき女子」と「ギバーおじ」のニュースを聞いていればわかるだろう。

女子は金権のおじさんに性的野心を向けねばならず、おじさんは路上をさまよっている若い女の子に性的野心を向けなくてはならないのだ。

それはもうさすがに恋愛ではない、はずなのだが、現代においては、これこそまさに恋愛という風情が漂っている。

性的野心と大切なものの区別をつける。

性的野心と愛はしばしば混在するが、混在していても区別はつける。

そしてどちらが主題になるかだ。

どちらが順で、どちらが逆か。

おれは愛が順だと思っているが、世間では性的野心が順だと思われる。

八方田マキャベリ聡子は、なにもふざけていない。

ふざけているのはおれのほうだ。

世の中は、八方田マキャベリ聡子を応援し、彼女の味方になる。

では、八方田マキャベリ聡子は助かるのだろうか？

その問いかけについては、きゅうに世の中は口をつぐむか、回避の態度をとる。

冷たいもんだなあ。

一方、おれは助かるのだろうか。

世の中の文脈では、おれみたいなふざけた奴は、助かつてはならないという事になっている。

おれはおれの「順」を、大真面目に進んでいるつもりなんだけどなあ。

覚えておけ、SDカードだけは、バッタモン屋で買わないと、値段が異常に高すぎるのだ。

正規品を販売している、カメラ屋のおやじに、その点だけはだまされないように。

(この部分は本旨に何も関係ないが、SDカードだけはバッタモン屋や通販で買うしかないというのはマジだ)

八方田マキャベリ聡子は、女性としていくつもの美点を持っており、肢体にじゅうぶんな美貌と性的魅力を具えている。

それに比べて、おれなどはどこにも美点を持っておらず、肢体に美貌や性的魅力を具えていない。

八方田マキャベリ聡子は、自分が愛されるべきだと思っているが、おれ

はそうは思っていない。

八方田マキャベリ聡子は、夜な夜な追い詰められて「死にたい」と思っているが、おれは追い詰められていない。

おれは夜な夜な飛び立っているよなあ。

八方田マキャベリ聡子は、背の高いデキる彼のことにについて、  
「本当に好きなんです」  
と言った。

ところが背の高いデキる彼は、大手の取引先にヘッドハントされ、なんとどこかの家柄を継いでくれという話になり、その家の長女と結婚して婿入りしてしまった。そのとき長女はまだ十九歳の処女だったという。

八方田マキャベリ聡子にとって、彼などはまったく大切な人ではなかったということが明らかになってくる。

聡子はただ、自分が素敵なことになりたかった。

聡子は彼のことを、

「そんなロリコンみたいなどころがあるとは知らなかったし、家柄とか、そんなことに飛びつくとは思っていなかった。いま思い返すと、うわー、無理。なんかもう、何もかもがキモい」  
と言い、顔をしかめて笑った。

それで聡子はいつからか枯柳揺男と寝るようになった。

枯柳揺男はやたら執拗に電動器具で聡子のことを責めた。

はじめ聡子はそのことを馬鹿にし、ベッドの上で大笑いするほどだったのだが、ある夜聡子は、

「死にたい。何かわかんないけど、ちょっと来て」

と枯柳揺男を呼びつけ、その夜初めて彼の電動器具は聡子の芯まで効いた。

聡子が薄目を開けたとき、そこには執拗に聡子のことを責め立てる枯柳揺男の顔があった。その顔は無表情のようで、同時に眼球に狂気の熱をはらんでいた。

いじめられた少年が、夜な夜なひとりで鋼板を相手に、復讐の溶接作業をしているというような顔。

聡子はその顔に、

（まったく大切にされていない。コイツはただ自分の満足のためにだけ、  
こういうことをする奴なんだ）

と直観し、その直観がトリガーとなって、聡子の中枢が開いていった。  
中枢に電動器具の振動が届き、聡子は激しいオーガズムに吞み込まれていった。

なんだこのどうでもいい話は、まったく主題じゃねえ。

こんなものに快感を高めるアホは、罰として、青森まで行って大間産の本マグロのサクを買い、それを東京都足立区のカラスに食わせろ。往復は在来線だ。

おれはふざけている。

八方田マキャベリ聡子のほうはシリアスだ。

八方田マキャベリ聡子、あなたに恋愛なんかしないよ、ぜんぶただの性的野心だ。

八方田マキャベリ聡子のことを、大切に思う人はいないし、八方田マキャベリ聡子は、かけがえないものの中なんか生きていかない。

誰かに性的野心を向けられることを恋愛経験だと思っていて、誰かに性的野心を向けるのが夢だと思っているんだらう。

だから、他人の恋愛に猛烈な口出しをするのだ。

誰かの大切なものに対して、人は無節操に口出しなんかしない。

性的野心の経験しかないから、平気で口出しが止まらないのだ。

八方田マキャベリ聡子に、恋愛経験なんてゼロだし、これから先もゼロだよ。

残念ながら、根本的にバカで、根本的に誤解を抱えていて、その顔面に正論と厚化粧をほどこしている。

だからだ、性的野心と大切なものの区別をつけろ。それに比べりゃ自分が愛されるとかどうとかいうのはハナクソみてーにどうでもいいことじゃないか。

「性的野心」

## あなたの

## うらやましいことは

## 何だろうか

話の内容が思い出せない。

いや、誰かに聞いた話なんだけれど。

若い人は、他人のインスタグラムがうらやましいんだ、という話。

へえーそうなんだ、と、おれは驚いた記憶がある。

が、全体がどういう話だったか思い出せない。

なんか、うっすらとした記憶だと、

「わたしたちは、他人のインスタを見て、他人が充実しているのがうらやまして、自分を顧（かえり）みて悲しくなって、それで鬱ソングを聴くんです」

みたいな話だったような気がする。

でもただの気のせいかもしれない。

頼りにならない記憶だなあ。

とりあえず、他人のインスタを見て、それをうらやましいと感じるとい  
うのは、おれにとって驚きだった。

驚きだったけれど、考えてみれば当たり前だったかもしれない。

おれは、他人のインスタを見ても、何もうらやましくないけれど……

おれも若いころは、何かをうらやんだのかもしれない。

いつから、うらやましくなくなったのだろう。

いつからなのかは、はっきりしない。

おれが、寒空にひとり、コンビニのおにぎりを食っているときに、他人

のインスタを見て、他人がわいわいがやがや、着飾ってフォアグラとキャビアを食べていても、うらやましい、とは思わない。

おれは、寒空にひとり突っ立ち、コンビニのおにぎりを食っていると  
き、これ以上なく充実していると思う。

もし充実していなかったら、おれはヒマなので、もっと手の込んだ料理  
を自分で作って食っているだろう。

寒空に突っ立って、コンビニのおにぎりを食っていることは、そ  
のときおれは走り回っているのだ。

だからおれにとって、吉野家の牛丼などは、むしろ充実というイメージ  
になっている。

部活動で、徹夜の作業をしていて、「おい誰か晩メシ買ってこい」と後輩  
に言いつけると、買ってくるのはたいい吉野家の牛丼だった。

明るい元気な女の子をナンパして、気づくとどこか知らない駅前にい  
て、よくよく話を聞くとその女の子は韓国人で、夜中まで飲んで酔っ払っ

て、彼女は家に泊めてくれると言うのだけれど、そこまではいいやと言っ  
て夜中の駅前をひとりで迷走し、どうしても腹が減ったというとき、国道

沿いに吉野家の看板が光っているのだ。  
現在のテレビタレントが海外ロケをしていても、それをうらやましいと  
は思わない。

ただ、もったいないなあ、とだけ思う。

海外ロケといって、海外の食事やホテルを「ネタ」にするだけで、それ  
では何の体験にもならないのだから、もったいないと思う。

おれが旅先で、観光ガイドに載っていない温泉街に迷い込むほうが、お  
れ自身にとっては楽しい。

楽しいというか、自分の冒険に巻き込まれて、おれはどきどきしてい  
る。

おれはその迷走を、収録して、コンテンツにしようとはまったく思わな  
い。

むかし、あるカフェが閉店するという事になって、おれは店員さんと  
一緒に写真を撮ったのだが、おれはふと気づいて、写真を撮る前に、

「おれ、こういうの、どこかにアップロードとかはしないから」

「そうなんですか？」

「うん。自分が記念に撮った写真を、赤の他人に見せるというのが、おれにはさっぱりわからないのだ」

そういえば、おれのウェブサイトはもう十数年続いているのに、テキストばかりで、おれが気まぐれに撮った写真なんてぜんぜん載らないだろう。

おれは一眼レフを三台も持っているのだ。

(うち一台はニコンのフルサイズで、ほか一台にはフィルムカメラもあるぞ「ただの自慢」)

旅行記、みたいなものを書けば、それに写真を添える可能性はあるかもしれない。

けれども、たとえばおれが、仮に五つ星ホテルのロイヤルスイートに泊まったとして、そのテラスにプールがついていたとして、おれはその部屋の写真を他人に見せたりはしないし、窓からの眺望を写真に撮って人に見せたりはしない。

あるいはおれが、仮に美男子で、仮に筋力をして、仮に全身を脱毛し、仮に筋肉の引き締まった細マッチョになったとしても、おれはその細マッチョの半裸を写真に撮り、「ジムに来ました」と言っただけ他人に見せたりしない。

そういうことが、悪いと言っているのではなく、おれにはそうしたことをする動機がないのだ。

おれにとつては、そうしたことにモチーフは見い出せず、主題は見つからず、だから人に見せる動機がない。

そうして考えると、一般の人には、単に「うらやましい」という動機があるのかもしれない。

うらやましい、および、うらやましがらせる、という動機があるのかもしれない。

おれにはよくわからない。

おれには、初夏のころ、薫風吹き抜ける青空のもと、オープンカーで走

り回ってみたい、という願望がある。

けれども、じつさいにそうして走り回っているオープンカーを高速道路で見かけても、それについてうらやましいとは感じない。

だって、おれが乗っているわけではないし、おれが運転しているわけでもないし。

おれの知らないどこかのおじさんが、どこかのお姉ちゃんを助手席につけて、オープンカーで走り回っているのを、うらやましいと感じる仕組みがおれにはいまいよくわからない。

おれ自身が若いころはそうでもなかったのかな？

おれ自身が若かったころ、何かうらやましかったことといえば、たとえば、同期の男が付き合っているのがJALのステewardだったとか、知り合いの男が当時の読者モデルの女の子とラブホテルに行ったりとか、おれの知らないところで開いていやがった合コンの相手がテレビ局の女の子たちだったりとか、そんなことだろうか。

スケベな話ばかりだな。

なお、ステewardと付き合っているという話については、じつさいに会ってみるとその女性はあんがいプライヴェートでは気難しいタイプだったので、「あつ、けっこうたいへんなんだな」と思い、うらやましさは消えてしまった。

おれは、自分がどう生きるかのすべてを、自分で選択し、自分で実行しているの、他人の何かをうらやましいとは思わない。

とつぜん、買ってもいない富くじがあたり、その賞品としてロールスロイスがプレゼントされたとしても、そのことはそんなにおれにプラスにはならないという気がしている。

気がしているというより、はっきりと、そんなことはおれのプラスにはならない。

おれにとつてうらやましいことと言えば何だろうか。

もし、不動産として、自分のダンススタジオや、自分の収録スタジオなどを持っていれば、こんなに毎週、ガチャガチャ荷物を運んだり、あたふたと機材のセッティングなんかしたりしなくて済むのに、とは思う。

そうは思うけれど、仮にそうした不動産を所有していたとして、何かが良いのかというと、うーん、良いはなるのだろうか、プラスにはならないだろう。

遠くへ旅行するのに、リニアモーターカーが開通すれば、時間が短縮できるので、良いはなるのだろうか、それでつまらなかった旅行が楽しい旅行になるわけではない。

快適ということは、とても良いことだが、飛行機のファーストクラスに乗ったからといって、それだけで旅人になれるわけではない、とおれは思っている。

毎日がウキウキで楽しいレトリバー犬がいたとしたら、彼の寝床がせんべいぶとんでも、ふかふかの北欧家具でも、あまり違いはないのではないだろうか。

目黒駅前の、権之助坂の中腹にある「大宝」という店は、おそろしく店内が狭く、輪をかけてさらに厨房は狭いの、きちっとした職人のお兄さんが、ものすごくきちっとしたとんかつを揚げてくれるので、すげえなあと思わされる。

とんかつ屋としての快適さはまったくないはずなのに、すごい。

めっちゃウマイし、お弁当も出しているから、目黒駅に寄られる用事のある方は、ぜひいちどご検討ください。

おれがうらやましかったことは何だろう。

先ほど述べたように、若いころは、派手な合コンで派手なねーちゃんをいてこましているのは、うらやましかったのかもしれない。

だが、そのことにも何か違和感がある。

なぜ違和感があるかというと、おれがかつて、そうしたスケベネタを

「くうー うらやましいいー」と言っていたとして、そこから鬱ソングを聴こうという発想にはまるでならないからだ。

鬱ソングを聴こうという発想になるのは、なんというか、もっとシリアスで、もっと重症な何かだ。

おれは、うらやましいと思ひ、うらやましいと言ひながら、けっきよくのところ、アホになつても走り続けようとする誰もに對し、おれも立ち

止まりたくない、意地を張り、そのことに必死だっただけかもしれない。

同じうらやましいと言っても、その内実にはいろいろ種類があるのだろう。

うらやましいことといえば、むかし、女にぜんぜんモテない男がいて、そいつがめずらしく女の子に色よく相手してもらうことができ、すっかり恋に落ちて、電話口で必死に口説いているのをおれは横で聞き、何はともあれそいつはそのときアホ丸出しの全力だったから、おれは当てつけられて、自分自身について、

「あーあ、おれは何をやっているんだろう」

と思ひ、アホ丸出しで全力のことをやっているそいつのことを、二分間ぐらいうらやましく思つた。

それにしても、だからといってそこから鬱ソングを聴こうという発想にはならない。

うらやましいということ以前に、もともと何かがキツいのではないだろうか？

なんとなく、そうは言つてみたものの、自分でさえ何を言つてゐるのか、よくわからないのだった。

うらやましいことといえば、そうだ、ひとつ思ひつた。

まったく検索しなくていいが、動画サイトで「オゴウ クラハシ」と検索をかけると、あなたのまったく知らないものが出てくる。

もう一度言うが、まったく検索しなくていい。

出てくる動画は、それじたい二〇一八年とかのもので、もう古いのだが、ともあれその動画の中では、もうとつと中年のおじさんたちが、何かにムキになり、バチバチのやりあいをしているのだ。

二〇一八年から見て、もう二十年ぐらい昔のゲームの話、二十年ぐらい昔のゲームセンターの話、

「お前、あのときのアレは何だったんだよ」

というふうな、本気で言い合つてゐる。

うらやましい。

つまり、彼らは「ストII」の話をしているのだ（正確にはストII Xだけど、そんなことどうでもいいだろう）。

当時、時代のトッププレイヤーたちだった彼らは、驚いたことに、二十年後もトッププレイヤーであり続けている。

彼らにおいて、二十年前、ゲームセンター、唐突に与えられるたまり場、何の得にもならないのに帰宅してまで脳内で自分のプレイを突き詰めていく夜、縁もゆかりもない奴とあたらしく知り合うばかりの日々、強さと意地だけを認め合う仲、そうした時代が本当にあり、そうした熱気が本当にあり、そうした中を本当に生きたんだということが、いま現在も息吹をもって伝わってくるのだ。

ああ、うらやましい。

アホみたいな話だ。

だって、ただのストIIの話だからな。

ふたりはいつからか、因縁があって、怨恨があって、バチバチにやりあっている。お互いに、決して譲れないものを抱えている。そのまま二十年ちかくを過ごしてきた。

すべて「ストII」の対戦についてでしかない。

それを、ネタでやっているのではない、マジなのだ。マジでバチバチにやりあっている。マジで仲が悪い。

でも、同じゲームの話をしているのだ。同じゲームで、二人して、そのゲームにとってもなく深い理解を持っている。

そりゃそうだな、二十年間もトッププレイヤーであり続けているんだから。

観ていて、本当に仲が悪いというのがわかる。

けれども、ふたりともずっと同じゲームの話をしているので、仲が良いんじゃないのかも見える。

でも本当に仲が悪いのだ。まさに犬猿の仲で、もはや不倶戴天という趣き。

わけがわからない。観ていて脳が揺さぶられる。

ものすごく仲が悪いのに、そのふたりを、また周囲の人々を、今もまだ

あのときのゲームセンターとストIIの世界が包み込んでいるのだ。

それはきつと、一般に知られている「ゲーム」、一般的な意味での対戦ゲームやアーケードゲームとは違う世界だ。

それで、そのふたりのバチバチのやりあい、仲介人の案内によって、「こうなったら、対戦で決着をつけましょうか」

と進んでいく。

そしてふたりとも、そっぽを向きながら、そのことには意味ありげにうなづく。

そこには、双方からの、

「おれたちはそうして、やってきたんだから」

という声が聞こえてくるのだ。

なんて感動的で、なんてアホな話だ。

大のおとなが、二十年ちかく前の因縁を、二十年前のゲームで決着させているという。

それも、ふたりとも、あのときのまま続いている、現役のトッププレイヤーとしてだ。

こんなに、壮大さと、ささやかさが、ちぐはぐに現れているストーリーを、おれは古今に知らない。

そしてじつさいにその対戦は実現され、なぜかその対戦はオンラインでなんと一万五千人が見届けることになったという。

じつさいの対戦がどのようなであったかは、このゲームをかなりやりこんだ人にしかわからない。

そうして、聞いてもわからないという前提で言うところ、リュウの突っかかりようはまるで羅刹の気魄だったし、それでもそれを怜悧にさばきつづけるガイルはまるで何かの哲学が実体化したかのようだった。

両者が、ぶつかりあって、通じ合って、衝突し、よろこびあい、敵対し、尊敬し、燃焼して、冷静で、もう何がなんだかわからない。

なんの試合だ、これは。

おれは、ひたすらうらやましいと思いつつ、それ以上に、とても余人の踏み入れる領域にないと思いつつ、敵（おごそ）かに引き取る気持ちになっ

た。

根底はアホみたいな話なのにね。

うらやましいからといって、そこから鬱ソングを聴こうという発想にはならない。

そしてやはり、赤の他人がオープンカーに乗り、赤の他人が五つ星ホテルに泊まり、赤の他人がフォアグラとキャビアを食べていることに、おれは何のうらやましさも覚えなない。

おれはただ、

「おれももっと、アホに生きよう」

とばかり思う。

アホに生きた実物、そしてアホたちにしか為しえないシーンを見せられると、どうしても、おれはうらやましく思うので、おれも可能な限り、アホに生きようと思う。

あなたのうらやましいことは何だろうか。

鬱ソングにつながっていくようなものは、何か違うんじゃないかと、おれは思っている。

「あなたのうらやましいことは何だろうか」

人は

さびしいと

自我に穴があく

よくよく考えたら、おれが書いても書かなくても同じだ。

森林が砂漠化しているとして、「砂漠化しています」と書かなくても、森林は砂漠化している。

書くということに、事象への作用力はない。

だから、書くということには大きさが無いのだ。

大きさはゼロであって、数学で言うところの、点Pのような大きさしかない。

点Pには面積も体積もない。

書くというのはまさにそういうことだと思う。

デカイことなど書きようはない。

デカイことについて書くことはできるが、書くということじたいはデカくない。

台所のコンビーフ一缶について書くことと、ユーラシア大陸の歴史について書くことは、同じだ。

何を書くかということ、どうやって書くかということについては、ideaがない。

書く、という表現・作品に向かうということじたいの idea（考え方）は必要だが、何を書くとかどうやって書くとかの、実作の段階には ideaがない。

idea を持って取り組めば、あなたは必ず挫折してしまうだろう。

idea などというものは、世間通用性への採め事の中から、苦し紛れに生じてくるものにすぎない。

意味がわからないが、じつに正しいことを言っているので、説明などはないのだった。

現代人は承認欲求に苦しんでいる。

SNSをやっていない人も承認欲求に苦しんでいる。

それは、世間が……

もう、膨大な面倒くさが予感されるので、思わず書くのをやめたくなってしまう。

現代は承認欲求のバケモノを生み出してしまうのだ。

それは摩訶不思議なことではない。

あなたが Youtube を始めて、Youtuber になっていこうとしたら、まず初めに idea を問われるだろう。

どういう動画、どういうコンテンツを提供していくのか、その idea を問われる。

まさか、近所の工事現場をえんえん撮影して、無言をつらぬくナゾのチャネルというわけにもいかないものなあ。

おれが言うと、それだけで何かあたらしい idea なのかと錯覚されてしまう。

おれはいま、この十五年でわれわれにもたらされた、つぶやきの病について書くこうとしている。

そして、そういう idea がある以上、これについては書けないのだ。

書けないといって、それじゃあ主題が取り扱えないじゃないかということになり、困る。

だから、主題はありつつも、それが idea になつてはいけないのだ。

このことは厳しい。

idea によってではなく、「思いがけず」主題へ到達しろということなのだから、むつかしいも何も、アブローチの仕方が存在しない。

まあそれでも、たぶん到達するんだらうと、おれは思っていて、あつかましく構えている。

なぜ現代人は承認を求めているのか。なぜ承認を必要とし、承認を渴望しているのか。

逆に言う、なぜおれは、こうも承認を必要としないのか。

おれが承認を必要としないのは、おれはもう承認されているからだ。

おれは世界に承認されている。

まさに、これだよなあ、とおれは歓喜しているのだ。

おれは承認されているけれど、多くの人は承認されていない。

それで一般の人々においては承認欲求が爆発している。

「つぶやき」とは本来どのようなものだったか。

それは、  
「発信を意図しない、主にわだかまったホンネが不随意に漏出するもので、かつ最小の音量のもの」

たとえば、アメリカ大統領の所信表明演説は、発信するものだからつぶ

やきではない。  
酔っ払いが電柱とケンカしている場合、発信は意図していないかもしれないが、音量が最小ではないのでつぶやきではない。

ルワンダ大虐殺に先だって、ラジオ局は「隣人を監視しろ」と発信したが、これも発信しているのでつぶやきではない。

トイレの個室の壁に、「○○殺す」と小さく落書きしたら、音量は

小さく見えるが、不随意のものではないので、これもつぶやきではない。

あなたがテレビを観ているとき、やたら声がでかくてうるさいばかりの若手芸人がいたら、

「こいつ、うるさいなあ……」

とつぶやいておかしくない。

あなたはそれを発信しようとしているわけではないし、音量も最小限だ。

わだかまったホンネが口元から漏出しているだけであって、これを本来は「つぶやき」と呼んだ。

これが、たとえば老人になると、もうテレビのワイドショーとかに向かつて、

「いや、それはおかしいだろう！ あんな、そもそもな。向こうがそんなにやらしいことをしなければ、な、こんな揉め事には……」

と、でっかい声で話しかけるようになる。

それは音量が最小ではないので、娘から、  
「もう、声でつかいなあ。テレビとおしゃべりするのやめてよ」とたしなめられるのだった。

そこまで声がデカくなると、もうつぶやきとは言えない。

われわれはこの十五年、ずいぶん誤解をしてきた。

そもそも、ツイートというのは「つぶやき」という意味ではない。

このことは、オーディオ・オタクたちは、言われてみると気がつくだろう。

ハイエンドスピーカーの一部には、ツイーターという機構があるのだ。

スピーカーコーンとは別に、高音部分を担当する部分で、その機構はいかにも「さえずる」という感触で駆動する。

ツイートは「さえずり」なのだ。

さえずるというのは、鳥たちが春の恋を、非言語的に喉から鳴らすということや、舞踊のうち、舞いながら漢文を朗詠するというようなことだ。

上司にパワハラを受けたというような怨念のレポートを「さえずり」とは言わない。

われわれは、さえずりをつぶやきと誤解し（なんでこんな誤解が起こったんだ？）、さらにはもともとつぶやきというものがどういうものだったかを見失っていった。

あえて、とつぜん冷静になって申し上げるが、つぶやきたければベッドで寝転んでひとりつぶやけ。

つぶやくということにアプリは要らない。アカウントも必要ないし、スマートフォンもPCも要らない。

冬のモンブランに単独登頂して、その山頂でひとりつぶやくというときに、アプリなんか要らない。吹雪の中でひとりつぶやけ。

いま、漢文の詞章でも口唱するべきところ、さえずるのではなくつぶやくようになり、そのつぶやくというのも、

「発信を意図し、わだかまったホンネを恣意的に拡散するもので、最大の音量を目論むもの」

にすり替わっている。

めちゃくちゃだ。

だから、ここにはさえずりもないしつぶやきもないのだ。

何があるのかというと、もはや、自我に穴があいた人々の咆哮があるとしかならない。

おれの言っていることは大げさに聞こえる。

何もそこまで言わなくても、という気がする。おれもしばしば、そう思う。

けれども、おれが知っていることは、あなたが「本当に」何かをしようとしたときに、この問題は一気に表に出てくるということなのだ。

自我に穴があいて、うんぬん、これが、あなたに「何一つ本当のことはさせない」というように、あなたを根っこで支配してしまっている。

そのときが来るまできつとわからない。

そして、そのときが来るまでのんびり待っていて、いざそのときになって、何百回も頓挫を繰り返すうち、ついに、

「本当だ」

と気づくようでは、いささか遅すぎるのだ。

テレビのワイドショーに向かって大声でおしゃべりしている老人は、ありふれたこととはいえ、ちょっと不安に思える人だし、そこからさらにテレビ局に電話を入れて、全力でクレームを入れるのが日常になっている人は、たぶん神経があまりまでもでなくなっている人だ。もちろん例外もあるのだからけれど、例外の数にくらべて例外でない数のほうがきつと圧倒的に大きいだろう。

「ジジイ、テレビに向かっておしゃべりしても、向こうに聞こえているわけじゃないから……かといって、テレビ局に電話するのも違う。ジジイ、向こうは一視聴者のお前の意見なんかまったく求めていないし、まったく

必要ともしないから。目エ覚ませジジイ」

そのことがわからないのか、ジジイ。

もちろん、そのことがわからないからジジイなのだろうし、丁寧に言われてもなおわからないから、ジジイはジジイなのだろう。

長いことテレビを観すぎて、自我に穴があき、自分の腹の中と電波が直接つながっているように錯覚してしまったのだ。

「もう、テレビとおしゃべりするのやめてよ」

「なんやねん、うっさいなあ。別にええやないか！」

つぶやくということが、発信性を持つておらず、相手には届いている由もないということ、それを把握している人は健全だ。

テレビで、いま流行しているスコッチの飲み方、みたいなものが紹介されていて、

「こんな飲み方とか、見たこともないし聞いたこともないけど……」

とつぶやいたとき、そのつぶやきが誰かに届いているわけではない。

よくまあ、こんなウソを平気でつけるものだ、と感心して思うことがあるが、そう思おうがそうつぶやこうが、そのことは発信性を持たない。

誰にも届いていないのだ。

ジジイは、若い女性タレントがワイドショーに出ているのを見て、

「この子はなあ、あかんわ、年上に対する礼儀っちゅうもんを知らんわ」

と画面に向けて非難する。あるいは説教する。

でっかい声なので、それはもうつぶやきという範囲を逸脱している。

アイドルオタクは、

「茶髪にしたら一気に量産型になったんじゃない？ 元の黒髪のほうがずっと良かったと思うけど」

と、画面に向けてつぶやく。

つぶやく、というアプリ操作をする。

ん？

すると、あろうことか、そのつぶやきは、なぜか知らないが相手に届くようにはたらしきをするのだ。

「おい、赤の他人のアイドルとかいうやつに、いきなり髪型の注文ぶつけ

るのやめーや。相手は見ず知らずのただの女の子やろ」

「なんやねん、うっさいなあ。別にええやないか！ こいつらそういう商売やし、しよせんファンあつてのアイドルやないか」

そういえば昔、おれは学生のころ、部活動で合宿に行つて、その宿舎の一室で、

「おい、やめろ。テレビ消せ」

と言ったことがあった。

後輩の、一年生が、テレビに向かって、

「あー、なんか、思ったほどキモくないわ。逆につまらん」

みたいなことをぶつくさ言っていたのだ。

それでおれは、やめろ、テレビを消せと言った。

「えー、なんでですか。深夜番組つて、こういう観方するじゃないですか」

「うるせえ。知らねえよそんなこと。少なくともおれの前ではやめろ。お前が深夜番組をどう観るかなんて知らんわ、ただ聞いているこっちの耳が汚れるんじや。お前個人で、家でやれ」

こんなもの、当時は強権発動なので、どうしようもなく、後輩は口をとがらせて、いかにも不満ありげに、しぶしぶテレビを消した。

こんなの、いまだったら完全にバワハラになるなあ。

いまはこんな粗暴な言いようは許されない。

許されないからといって、おれがそれをやらないということではないけれどね。

人は、さびしくなると、自我に穴があく。

老人は、さびしいので、自我に穴があき、テレビに向かっておしゃべりをするようになる。

テレビに向かっておしゃべりしても、向こうには届いていないのだからけつきよくさびしいかぎりだ。

老人といっても、最先端の宇宙物理学を研究している老教授などは、さびしくないで、テレビに向かっておしゃべりはしないだろう。

ツイッター(X)はこうしたわれわれのさびしさの状況につけ入ってき

た。

さびしさにつけ入るといのは、ポケベルのころから変わっていないし、テレクラのころから変わっていない。

テレクラって……むかし、テレホンクラブというのがあって、要するに電話媒体での出会い系商売があったのだ。この番号にかければ誰かしら不明の異性に電話がつながるといような仕組み。いまでいえば、スカイプとかでする出会い系チャットのようなものだ。

人は、さびしくなると自我に穴があくので、たとえばさびしいおじさんは、キャバクラのお姉ちゃんと、交友関係があるような錯覚をする。

キャバクラのお姉ちゃんはもちろん、その錯覚に乗かって、その錯覚を満たしてやるためのサービスをするのだ。

赤の他人のいるところで、酔っ払ったおじさんが、カウンターに突っ伏し、

「あんの、クソ部長め……」

とつぶやいたところで、赤の他人は話を聞いてくれない。

でも、スナックのママがいたら、

「あらあ、どうしたの。何か、イヤなことでもあったの」

と色よく聞いてくれるのかもしれない。

おれは先日、あるテレビ番組を観ていて、はつきりと〇〇したという

か、おれ自身とは異なるものを見た。

(思わず伏字にしまった)

ある女性タレントが、誰かのことを指差して、

「お前が悪いんじゃない！」

みたいなことをでっかい声で言ったのだ。

何についての非難かというと、ある男性タレントが、交際中の彼女とうまくいかず、彼女と別れることになった、とかいうようなことについての非難だ。

その破局は、彼女のせいではなくて、お前が悪いんじゃない、ということへの指摘と糾弾なのだと思うが、それにしてもおれはひたすらびっくりしたのだった。

おれは、他人の色恋沙汰というか、他人の付き合ったとか別れたとかについて、そんなに堂々と口出しする気になれない。

仮にその男性タレントが、おれに向けて、

「おれが悪いんですかね？」

と訊いてきたとしても、おれは第一に、

「うーん……さあ、どうとも」

と言いよどむだろう。

つまりおれは、他人であるおれが、それぞれ個人の営んでいることに、口を差し挟むということに引け目を覚める。

自慢じゃないが、おれは、クラスメートの誰かが誰かに告白するという展開になったとき、クラス中がヒューヒュー言い出して色めき立ったとしても、それを見ないようにしてトイレに立つタイプだ。

陰キャだと言っているのじゃないぞ。

他人の営むことに、口出しはしたくないし、そもそも窃視したくないのだ。

おれの言っていることはそんなにキチガイじみているだろうか。

もしおれが、誰かアイドルのファンになり、おれなりの「推し」を持つたとしても、そのアイドルが引退するときには、事情の説明なんかしてほしくない。

誰かいい人が見つかって、交際していくとか、そういうことがあったとしても、そんなこと言わなくていいし、あるいは病気で引退するということがあったとしても、その病名まで詳しく言わなくていい。

つぶやき文化以降、人々の自我には穴があいてしまった。

テレビ番組といって、ほとんどの番組は舞台裏やプライベートを窃視するものばかりになったし、人々の話題にのぼるのも、「裏の顔」みたいなことばかりになった。

おれはボン・ジョヴィがプライベートでどんなセックスをしているかなんて一ミリも知りたくない。

プライベートを窃視した結果、キモいと思うのではなく、そもそもプライベートを窃視しようとする発想・基本動作じたいを、おれはキモい

## 鉄の板

と感じている。

悪趣味に踏み込んでの悪ふざけ、というのはもちろんわかるのだが、そのことに衝迫力で飛びついているのが、おれにとってはまったく不可解で気持ちが悪い。

橋本環奈が、年収をどれぐらい稼いでいて、裏でマネージャーへの当たりがどうキツくて、プライヴェートでどういう男が趣味なのか、おれはミリも知りたくない。

人は、さびしいと、自我に穴があくのだ。

ということは、いま、人々はじつは猛烈にさびしいのだろうか？

「人はさびしいと自我に穴があく」

困った。

アデランスにシーチキンを発注してしまった。

なんでそんなウソを書くんだ？

エッセイというのは、基本的にウソを書いてはいけない。

しかし、九折大先生の叢智が大爆発する。

鉄板の中には何があるか。

鉄板の中身は何であるか。

鉄板の中身は鉄だ。

すべては終わった、いつものあの坂道を散歩しにいこう。

こんなのさあ、エッセイのふりをした詩文でっせ。

ようやく、おれはおれ自身の本質を掴んだ気がする。

こいつ、けっこうとんでもないことをしていやがる。

いつものあの坂道を散歩しにいくというのがどんなに豊かなことか。

魂魄がうによんしているのが手に取るようにわかる。

われわれには中身がない。

本当は中身がないのだ。

うげえ、そんなのもうめちゃくちゃでっせ。

めちゃくちゃな思い違いじゃないですか。

そのとおり、本当に思い違いなのだ。

こんなでたらめに見える話が声として聞こえるのはヤバイヤバイ。

われわれには中身がないので、何かを知ることとはできない。

知る、ということはできないし、識（し）る、ということもできない。

錯覚なのだ。

錯覚を作り出す仕組みがちゃんある。

何かを知る・識ると、われわれはそれが自分の「中」に入ったと思い込

むけれど……

われわれにはそもそも内部がない。

ぜってーわかんねえよこんな話。

ただ何か、この文面からヤバイものを体験するだけだ。

それでよろしい。

鉄板に中身はない。

鉄板の中身は鉄だ。

だからわたしに中身はない。

わたしの中身はわたしだ。

鉄板は鉄ですと言っているままだな。

鉄板の中に目玉焼きは入らないように、あなたの中に知る・識るなんて

ことは入らない。

知る・識るということに（本来は）作用力はない。

森林が砂漠化しているとして、それを知っているように知っていまいが、

森林は砂漠化する。

森林が砂漠化しています、というウソのニュースを聞かされると、あなたは「緑化しよう」と言い出すが、森林は砂漠化しておらず、あなたは

「なあんだ」と肩透かしを食らう。

それはあなたの必要な苦しみだ。

あなたは自分に中身があると思いついて苦しんでいる。

作用力を錯覚している。

鉄板をハンマーで下突きました。

鉄板を下突きつづけると、鉄板はフライパンみたいな形になりました。

さらにそのフライパンを下突きつづけると、中華鍋みたいな形になりました。

した。

それをさらに下突きつづけると、鉄板は花瓶みたいな形になりました。

ん？

花瓶を覗き込んでみよう。

花瓶には穴があいているから、覗き込むことができる……

ように思える。

でも正しくは、花瓶には「口」があいている。

穴があいているわけではない。

トポロジ的に言って、花瓶に穴はあいていない。

ここであなたは、トポロジーという語を Google で検索し、どうしよう

もないわけのわからなさに直面し、引き返してくるだろう。

Tシャツにはいくつの穴があいているか。

四つと言いたくなるけれど三つだ。

首元と、袖口の二つと、裾と、計四つに思えるが、別の考え方をしろ。

一枚の布を用意し、それに三つの穴をあけるのだ。

三つの穴をあけたら、あなたはそれを「着る」ことができるだろう。

真ん中の穴に頭を突っ込み、両隣の穴に右腕と左腕を突っ込む。

すると、布の外周があなたの身を覆い、あなたはその布を「着る」こと

ができる。

だからTシャツの穴は三つ。

花瓶の穴は？

花瓶の穴はゼロだ。

あなたは一枚の鉄板をハンマーで下突いて、変形して花瓶にしたじゃないか。

いか。

もともと鉄板に穴はあいていなかっただろう。

だから花瓶に穴はゼロだ。

鉄板の外周が、花瓶の「口」になっただけだ。

ここでわれわれは誤解を生み出す。

花瓶には「中身」があるように見えるのだ。

花瓶の中には水を入れることができる。

われわれの中には何かを入れることができる、気がしてくる。

花瓶の中に水を入れることができるように、われわれの中には知る・識るを入れることができるように思えてくる。

錯覚なのだ。

われわれは鉄板であって、鉄板の中身ではない。

あなたは0歳のとき、鉄板として、この世に生まれてきた。

0歳のときには中身がないので、まだ何も知らないし、まだ何も知らない。

ただの鉄板だ。

それであなただちは、八十八歳になったときに、何になっているのか。

いや、鉄板は鉄板だろ。

八十八年間で、いろんなものを知った・識ったと、思い込むだけだ。

それが自分の中身だと錯覚するのだ。

おれは、現代について、自我に穴があくという説明をしている。

自我に穴があれば、つぶやきが放出されるし、つぶやきが流入するだろう、それはわかりやすい話だ。

わかりやすさのためにそう説明しているのだが、どうやらガチの真相は違うらしい。

本当は、自我に穴があく、ということのようなのだ。

口があくということになると、ますます、そいつはあれこれつぶやきそうではある。

われわれは自我を「中身」だと思い込んでいるのだ。

中身とは、知る・識るの「溜まり」だな。

花瓶の中の水のように。

それを自我だと思っている。

デカルトは、「我思う、ゆえに我在り」と言った。

それは、「水溜まる、ゆえに花瓶あり」と同じだ。

デカルトの言っていることは、誤りではないが、誤解の種になった。

鉄板は必ずしも花瓶の形にならなくていい。

水が溜まらなくても鉄板は存在する。

花瓶に水が溜まるということに比べると、観測できないので、確かめられず、つまり確かめられないので、不確かだということだが、それにしても鉄板は存在する。

不確かであれ、存在の本質は鉄板であって、花瓶の形が存在の本質ではない。

デカルトは、鉄板の存在、「我」の存在を、「中身」によって確かめら

れる」と言っただけだ。

「平助さん、最近、ウチの酒が、ヘンなおいするんでさあ」

「なんだって。じゃあちょいと、おいらが推理してやろう」

「頼みますよ」

「まずおいらが推理するのはなア、お前んちには酒瓶があるってこった！あるいは酒樽か、おちようしか、酒の枴ってこともあらあ。なんにしてもそういう物がある。どうだい、この推理は、凶星のどんびしゃってところだろう」

「あんたねエ、そりゃあ、当たり前すぎるってもんですよ。こちら酒のにおいがヘンだって話をしているんですから、そりゃあ家に酒瓶があって当たり前ですよ」

「酒匂う、ゆえに酒瓶ありつてなア」

「あんた何の話をしているんです？」

われわれは、もともと自我を球体のようなものとイメージしている。

球体の中身は空洞だ。

空洞ということは、空っぽということだ。

空っぽではさびしいので、われわれは球体に穴をあけようとする。

本当には、穴ではなく口をあけるのだが、われわれはそれを穴だとイメージする。

そしてじつは、穴をあけなくても、もともとその球体には口があいている。

なぜなら、もともとの形は平たい鉄板だからだ。

「穴」と言っているが、じつは「輪っか」も「空洞」も同じ穴であって、

次元が違うだけだ。

（詳しく知りたい人はトポロジーをやっている数学科の奴に訊け）

トポロジーの言い方とはズレるが、「面積だけある穴」が輪っかで、「体積である穴」が空洞だ。

なんにしても、本当は、鉄板には穴はあいていない。

穴の話が出てくることじたい、われわれが錯覚の見当違いの的外れの中にいるということを示している。

鉄板が変形して花瓶の形になりうるといっただけだ。

鉄板を変形させて花瓶の形にしたとき、わざわざ「穴」はあけなかったろう？

おれの言っていることは単純で、「わたし」というのは、その鉄という素材だ、と言っているだけだ。

これが一般には、「わたし」というのは、花瓶の中に溜めた何かだ、と思われるということ。

蓄積的なもの、貯留的なものだと思っている。

そしてそれを、ドカーンとかドバツとか、チヨロチヨロとかやるものだと思っている。

おれは、「自我の中には『わたし』しかない」とよく言う。

それ以外のものが入っているのは根本的に誤りなのだ。

そしてこの話は、たいてい、自我という球体の中に、わたしだけが孤立して閉じ込められている、というイメージで捉えられる。

そうではないのだ。

もともと球体ではないし、その内部空洞が「わたし」だと言っているのではない。

一般にはどうなるか。

球体の中身は空洞だ。

空洞は穴であって、「空っぽ」だからさびしい。

つらい、というぐらいにさびしい。

単なるさびしさではなく、キツいさびしさなのだ。

それで、球体に穴をあけ、外部のものを内部にインさせ、煮詰まった内部のものを外部へアウトしようとする。

そんなものがコミュニケーションになるかよ。

そんなものはコミュニケーションにはならないのだが、なにしろ自我の根本、自我の象（かたち）を誤解しているので、コミュニケーションという、そういうものという感覚しなくなる。

つまり、球体にあけた穴から、ホンをドバツと出し、相手の穴にぐいぐい流し込む、それがコミュニケーションだと思われている。

向こうもそう思っているので、やはり向こうも穴からホンをドバツと出し、こちらの穴にぐいぐい流し込んでくる。

その作用力の強度を競いあっている。

どちらがより強い水圧で、また大きな水量で、ドバツとぶちまけてくるか、ズゴーツと流入させてくるか、そんなことを競いあっている。

んなアホな。

「やいやい、おれは強盗だ。殺されたくなければサイフをよこせ」

「ひえええ、命だけはお助けを。財布、財布をわたせばいいんですね」

「そうだ財布だ、早くしろ」

「じゃあ、いま、お金とカード類を取り出しますから……お札と、小銭と、クレジットカード。病院の診察券も。抜き取って、これでよしと

はい、これどうぞ、サイフです。これけっこう高かったんですよ」

「てめえ、バカやろう、これはただのサイフじゃねえか」

「サイフをよこせっておっしゃったじゃないですか」

「バカやろう、これじゃまるで、おれがサイフコレクターみてえじゃねえか。そうじゃねえ、サイフの中身をよこせって言ってるんだよ」

「じゃあ最初からそう言うてくださいよ。まったく、あんたがサイフをよこせなんて言うから、こんな二度手間に……ところで、わたしの診察券なんか何に使うんです？」

「そうじゃねえ、診察券は要らねえよ。サイフの中身といっても、中身のうち金目のものをよこせって言ってるんだ」

「そんな、あなたが、言うことが二転三転するんだから、もう。あつ、ほら、あなたがもたもたしているから、おまわりさん来ちゃいましたよ」

「ちっ、バカやろう、覚えてろよ、ちくしょー」

一般には、中身のやりとりがコミュニケーションだと思われている。

中身に、意見や正論、モチベーションや、知識や趣味、思いや感情やこだわりなどを溜め込み、それを煮詰めてホソネにまで熟成し、ドバツと流出させるのがコミュニケーションだと思われている。

じつさいには、そんなことでコミュニケーションにはならないので、お互いにどこかで「キツい」と感じている。

楽しくやっているうちはいいけれど、蓄積的に、正直しんどくなるのだ。

しかも、しんどくなる上に、誰かとコミュニケーションしたという感触もけつきよくないので、人はますますさびしくなっていくてしまう。

ここは精密に理解しろ。

お互いに内容物を交換しあうだけだから、そこに「誰か」はいないのだ。

コミュニケーションした結果、なぜか、誰もいないという感触だけがあとに残るので、ますますさびしいということになる。

でも、そのコミュニケーションのつもりのやつで、もうしんどくなっているの、これ以上はもう無理、とギブアップしている。

このさびしさと、無理さを、いったいどうしたらいいのか。

それで人々は「つぶやく」ということに行き着いた。

ウェブ上であれ対面であれ、

「これはつぶやきなのだ」

というやり方を発見した。

内容物の放出、そのコミュニケーションならざるものを、

「つぶやきだから」

という言いようで人の面前へぶちまけることにした。

むちゃくちゃだ。

むちゃくちゃだけど、本当にもう、元のやり方がわからないのだからしょうがない。

おれは意地悪を言っているのではない、という経路で迷子になったのかを説明しているだけだ。

コミュニケーションといって、そんなの、あなたの目の前で、おれが無言で手巻きたばこを巻いているだけのほうがマシだ。

おれからは何も漏れ出てこない。

おれからは何も放出されてこないのだからあなたは疲れない。

おれが手巻きたばこを巻いているだけで、あなたは、

「わー、九折さんだ」

と体験する。

おれは、

「ん？」

としか言わないだろう。

おれからぶちまけ放出するものなんか何もねえよ。

おれは花瓶じゃないし、穴のあいた球体でもない。ただの鉄板なんだから、内容物というものがそもそもない。

内容物がないのだからぶちまけようがない。

おれは容器じゃねえんだぞ。

なんでこんなにちの奴らアみんな容器になっちゃったんだ。

おれはオープンになろうとしているのではない。

容器じゃないのだからオープンもできない。

ただの鉄の板だ。

生まれたときに鉄の板で、死ぬまでずっと鉄の板だ。

たぶん死んでもからも鉄の板だな、何も変わらないだろう。

内容のないおれの話聞かせてやろうか？

うーん、まあいい、話してやろう。

話すまでもないようなことだが……

あ、インターホンが鳴った。

発注したシーチキンが届いたので、ではまた。

【鉄の板】

# 十五年

## つぶやきの病の

### 真相

作品でいいのだ。  
書物でいいのだ。  
書物を手取る。  
いつのまにか読んだ。  
それで何になる。  
何にもならないのだ。  
何かになる必要はない。  
あなたは書物を手を取った。  
魂を得たのだ。  
氣を受けて、魄を帯びており、靈を覚え、魂を呼んだ。  
それで何になるかといえば、何にもならない。  
何かになる必要がない。  
それは書物なのだから。  
評価しないと作品が存在しないわけではない。  
作品はあなたの宇宙へ飛んでいった。  
誰の作品だったのかなんて知らなくていい。  
アレを呼びたいと思ったら「アレ」と呼べばいい。  
それはコンテンツではなかった。  
コンテンツというのは「内容物」だ。

コンテンツに入っているものを英語でコンテンツと呼ぶのだ。  
あなたの体は安らいでいる。  
コンテンツであなたの体は安らがない。  
コンテンツはあなたの内部に流入する。  
それであなたは自分の中身が充実したように思う。  
中身が充実したので、さびしくない、という気がする。  
このあたりであなたはよくわからなくなってくる。  
中身が充実しているのにさびしいわけではないはずだ、とあなたは考える。  
あなたはいつのまにか、中身が自分だと思うようになっていく。  
つぶやき文化の中、あなたは自分の中身を漏らす。  
それがコミュニケーションだと思うようになっていく。  
あなたは知恵をこらし、頭をひねって、ちょっと気の利いたつぶやきを投稿した。  
それは少しだけバズった。  
あなたの漏らしたつぶやきは、多くの人に受け入れられた。  
あなたの中身が、漏出して、誰かの内部に流入していった。  
あなたはそれがコミュニケーションだと思い、それが、自分が承認されることだと感じた。  
承認されたあなたは少し自信を持つことができた。  
中身をさらに充実させ、割と自分の得意分野では負けられないという気がしてくると、あなたはますます自信を持つようになった。  
あなたの中身は、しょっちゅう誰かの内部に受け入れられていく。  
気づくと、あなた自身がコンテンツみたいになっている。  
あなたは自分の有益な中身を、さらに広く受け取ってもらうため、Youtube で動画を作成した。  
数万人がそれを視聴して、数百人が「いいね」をつけた。  
このときあなたは自分にコミュニケーション能力がないなんて思わない。  
自分が誰にも受け入れられていないなんて思わない。

自分には、物事や考えを的確に伝える表現力があり、登録者数から考えて、

「いまけっこう、認めてもらえているんだよね」

とあなたは思う。

あなたはじゅうぶんな自信をもって生きている。

他にも、中身が充実している人たちがいて、彼らと知り合うことで、

「自分なんてまだまだ」

と思った。

彼らのことを、濃いメンツと感じ、彼らと中身の授受ができる仲にあるのは、自分にとって自負と誇りに思えた。

グロイ。

グロイと言われると、あなたはなぜかギクツとする。

グロいなんて言われるころあたりはどこにもない。

けれどもなぜか、グロイという言葉は、あなたにとって聞き逃せないヤバさを秘めている。

あなたはふと、知り合いに、

「なんかさあ、とつぜん、意味もなく死にたくならね？」

と言い出すようになった。

女子中学生が、友人同士で「TikTok」を撮影し、制服姿で短いスカート、じゅうぶんに膨らんだバストを揺らしてアピールし、直後に照れくさくなつて、恥ずかしさに笑って録画を切る。

投稿された動画は「かわいい」「エロい」「天使かな」「あら〜」と絶賛だ。

女子中学生の彼女たちはグロイ。

グロイ？ そんなはずはない。

何万ものファボがついている。

ここでグロイという見当はずれの指摘がされていることについて、あなたはどこまでも不可解に思う。

けれどもやはり、なぜかそのグロイというのが聞き逃せない。

ビール瓶コレクターと称する人が、テレビ番組に出て、そのことへの造

詣の深さと知識の一端を番組出演者らに披歴する。

変わり種だが、自分が好きになれるものを持っていて、独自の世界を開拓しているんだな、というふうに思える。

グロイ。

何がグロイのか？ どこにもグロイところは見当たらない。

けれどもやはり、なぜか聞き逃せない。

グロさの理由を教えよう。

中身が自信になつていくからだ。

中身の充実や、中身の正しさ、中身の強さが、自信になつていく。

本当は自信なんてゼロなのに。

全身・全体から漂ってくる自信のなさがある。

まるで肉のすべてが怯えているような。

にもかかわらず、自信に満ちた態度で振る舞い、自信に満ちた物言いをし、自信に満ちた挙動をする。

控えめなふり、をいちおうはして見せるけれど、電波やウェブで何十万人にも観察されながら、堂々としているというぐらいに自信がある。

でも自信があるわけがない。

ビール瓶コレクションで自信を得ることはできないし、女子中学生が性的にそそるというところで自信を持つこともできない。

にもかかわらず、自覚的には自信があるのだ。

「わりと、認めてもらえているんで」

承認欲求が満たされているからこそその自信がある。

これらの自信がすべて、見当違いのものだったとしたら。

特定の人たちだけではない、ほとんどすべての人たちが、その見当違いの、本当には自信でないものを、いつのまにか自信だと思い込んで、十五年を過ごしてきたとしたら。

膨大なグロさが水面下に蓄積していることになるだろう。

個人的なことではなく、もはや疫学的なレベルで、そのグロさは、暴かれないまま蓄積している。

外国旅行の、高級ホテルでの二泊三日を、インスタグラムで発信する。

「とっても素敵な体験になりました」

という一言を添えて、画像と動画を投稿する。

自分が旅行したのだから自分が体験したものに見える。

けれども本当はそうではない。

体験にはなっていない、とても残念なことながら。

体験にはなっていないから、他人にシェアできているのだ。

人は自分の見た悪夢を他人にシェアできない。

自分の見た悪夢で他人が恐怖することはできない。

体験はシェアされないのだ。

体験じたいをもたらず作品の主客でも成り立たせないかぎりには、他人を体験にいざなうことはできない。

高級ホテルでの二泊三日は、自分の中身になっただけだ。

中身というものは、取り出すことができるし、漏出させることができるし、放出させることもできる。

自分の中身というものは、比率を帯びた情報でしかない。

いちおう早稲田大学卒です、という学歴をSNSで放出することはできる。

早稲田大学は、上位の大学だという比率を帯びている。

高級ホテルというのも、安ホテルとならべたとき価値が高いという比率を帯びている。

だがそれは情報であって体験ではない。

百本の映画を観たとき、全員が百本ぶんの体験をするということはまったくない。

記憶力がよければ、映画の百本を自分の「中身」にすることはできるが、それは映画の作中を体験することではない。

自分の中身とは何か。

自分の中身とはセルフ・コンテンツだ。

人々はいま、セルフ・コンテンツを放出している。

まるでその内容物が自分だというように。

もしその内容物が本当に「自分」だったら、人は大きな自信を持つこと

ができるだろう。

自分の内部に、強い思いや、強い衝動、強いであろう正論や、強い主張、強い意見、強い感情、そうしたものが、高級ホテルでの宿泊ともども、内容物として入っているのであれば、内容物は膨大だ。

膨大で、強くて、充実している。

もしそれら内容物が「自分」だというなら、この人は大きな自信を持つことができるだろう。

でも、もし内容物が「自分」ではないのだとしたら。

現代のグロテスクさはこのことにある。

自分ではないものを自分だと思っている。

内容物を自分だと思っている。

だから何でもかんでもを自分の内部に流入させ、なんでもかんでもを自分の外部に流出させる。

「あつ、わたしこの服すっごく好き」

「おれこういうの許せないんだよね」

「上から目線ってマジむかつくよな」

「〇〇は謝罪すべき」

「知り合いに自分の才能を指摘してもらった。思いがけない指摘だった」

「月に十冊、本を読む習慣をつけています」

「なんで男ってさあ」

「せっかくなので〇〇してみた」

「おれの推しは××だけど、△△ちゃんのことにもすなおに尊敬する」

「あれはアイツが悪いでしょ。言わせてもらおうけど」

「早く平和が戻ってほしいと思います」

「あのさ、身だしなみとしてダサすぎんじゃん？」

「うわあ、でっかい船ですなあ、びっくりしたあ、おどろきますよ」

「僕けっこう動物とか好きなんですよね」

「自分の中でぜったいのルールがあつて」

「この食べ方マジでおすすめなんで、よかったら見てってください」

「電車の中にカップルがいて、イケメンの彼氏がすごくいいことを言って

いた」

「三十歳までにやっておいたほうがいいことが五つある」

「食べ方が汚い人って、なんか根本的に人として信用できない感あるわ」

「こういう歩き方をする人って、典型的に仕事ができない人の特徴なんだよね」

「この□□ってお笑い芸人のことを、最近どこか認めている自分がいる」  
こうしたもののすべてを「自分」だと思っている。

自分に流入するものを自分だと思っており、自分からつぶやき放出するものを自分だと思っている。

もしそれらがすべて、「自分」ではないのだとしたら。

この十五年間、「自分」は何もしてきていないということになる。

何もしてきていないし、何も得てきていないし、何にも触れてきていないし、何も生きてきていない。

十五年間、内容物のぶちまけあいをしてきただけで、十五年間、誰とも話していないし、誰の声も聴いていない。

十五年間、自分の姿もなければ、自分の声もなく、自分の話もなく、自分の生もなかった。

あったのは「内容物」の、無節操な貯留と放出だけ。

こんな大規模なグロテスクさに、もはや誰も向き合うことはできない。

自分の内部に、作用力のある外部のものが流入することを、ユング心理学では自我インフレーションと呼ぶ。

ただ、そうした心理学はへたすると百年近く前のものなので、現代のわれわれにきれいにはあてはまらない。

電脳通信が端末化までされ、人々が一日あたり五億件のつぶやき文化を生きているようなことは、ユングの時代の前提にない。

内容物は自分ではない。

内容物が自分だと思っている。

内容物に自信がある。

けれども自分に自信がない。

自信のある、充実した面持ちで、しかし本人はスッカスカだ。

中身は充実しているはずなのに、ものすごいさびしさを抱え込んでいる。

自殺をささやきかける現代の若いポップスが染みわたる。

中身はパンパンなのに、自分はスッカスカだ。

セルフ・コンテンツは「自分」ではない。

わたしは一般人の人よりスコッチに親しんできて、モルト専門のバーに行くと、並んでいる銘柄のほとんどにころあたりがあるが、それはわたしの内容物にすぎず、いかなるスコッチ瓶も「わたし」ではない。

そんなものがわたしである必要はない。

わたしがスコッチを愛しているのは事実だし、特別に思い入れのある銘柄があるのも事実だが、それを放出して誰かの内部に押し込もうとはミリも思わない。

おすすめのコッチの銘柄なんてどこにも書いたことがない。

わたしのことを、スコッチに詳しい人と承認してもらわなくてけっこうだ。

わたしは、フルサイズとフィルムカメラを含めた一眼レフを三台持っているが、二十年近くウェブサイトを運営してきて、自分の撮った写真をわけもなくアップロードしようとしたことは一度もない。

わたしがここにずいぶん長き書き話をだらだら示しているのは、あなたに「おれ」を体験させるためであって、おれが自分の内容物をぶちまけるためではないし、おれの内容物をあなたの内部にブチこむためでもない。

あなたはおれの同一性を体験するのであって、おれの内容物を知るわけではない。

「わたし」とは何なのか。

なんでも言うておく、まず内容物は「わたし」ではない。

あなたがこれから二百種類のスコッチを飲んだところで、それらのスコッチは「あなた」にはならない。

多くの人が、本当にこのことを誤解しているのだと思う。

「わたし」とは何であって、「わたし」はどのように承認され、「わたし」

はどのように体験されるのだろう。

うそも隠しもなく、はっきり言っておく。

おれはあなたの目の前に行き、眠たそうに座り込んで何も言わず、ただポーッと、手卷きたばこを手元でくるくると巻いていよう。

それだけであなたは、

「わー、九折さんだ」

と体験する。

必ずそうなると保証しておく。

おれのことを知らない人でさえそういうふうに体験するのだから。

もうこのあたりの事実には節度のフィルターをかけていられる状況ではなくなった。

このときついでに、内容物がパンパンで自信のある笑顔のAくんも、おれの隣に座らせようか。

Aくんはにこやかに、あなたに自己紹介してくれるかもしれない。

あなたはAくんを体験するだろうか。

いいや、あなたはAくんとなりてたばこをくるくる巻いている無言の九折さんを体験するばかりで、さわやかでイケているふうのトークをしてくれているAくんのこととはなぜか「体験はできない」と感じる。

このときにおけるAくんが、どれだけグロテスクかわかるだろうか？

Aくんは、内容物がパンパンだが、自分がスッカスカだ。

Aくんは、自信にあふれているが、自信をまったく持っていない。

Aくんは、技巧派バンドでベースギターを演奏しているが、技巧的にはキマっているのに、そのサウンドはスッカスカだ。

この十五年間、何をしてきたか、とAくんに訊いてみるか。

Aくんはアゴに手を当てて、自信のある表情を作り、いろんなことを話してくれるだろう。

たくさん知り合いがいて充実している、みたいな話を聞かせてくれるに違いない。

いっぽうおれは、同じ質問に対し、

「さあねえ」

としか言わないだろう。引き続きたばこでも巻いていることにする。

あなたは、目の前のこの人が、とんでもない量の体験を得てきたんだ、ということ直覚する。

直覚して、ドキつとして、なぜかあなたはうれしくなり、よろこんでしまふ。

Aくんが自信を持てる道理などどこにもない。

でもAくんは自信たつぶりだ。

とてつもなくグロテスクな状況にある。

Aくんの同級生、Bくんは、いま若手のお笑い芸人として、賞レースにトライしている。

Aくん自身も、

「おれって割と、お笑いについて、自分なりの考え方を持っていさあ」と言い、

「それで、Bとけつこう議論とかして、けつこういつも盛り上がって。その議論の結果を、Bは実践に生かしてくれていたりするんだけど」

と続けてくれるだろう。

とても関心を惹く、興味深い話だ。

でもスッカスカにしか聞こえない話だ。何の関心も惹かれないし、何の興味も湧かない。

おれはそのへんの野草の葉っぱを引きちぎり、

「この葉っぱ、けつこういい匂いするの」

とあなたに示そう。

あなたはその葉っぱにぜったいの関心と興味を覚えるだろう。

あなたは自分もそれを体験したいということに一秒で吸い込まれていくはず。

Aくんは、公園のベンチに座り、足許をうろつくハトを見ていた。

あなたはAくんのとなりに座ってみた。

あなたはAくんの肉体の内部から、さわがしさを聞き取るだろう。

Aくんは、その無意味にキメている表情の内側から、ずっとぶつくさ、無言で何かを云っているのだ。

ずーっと何かを思い、ずーっと内心で何かをつぶやいている。  
うるさい。

隣にただで圧迫感がある。

あなたは数十秒で、Aくんのとなりにいるのを「しんどい」と感じ始める。

そのとき、おれも無意味にハトを見ていたとしよう。

こんどはあなたはおれの横に座ってみる。

あなたは、おれの全身がとてつもなく静かだということに驚愕するだろう。

内部に何の思念もなく、内部に何のつぶやきもない。

少なくとも、何かが漏れ出てくる気配は一切ない。

あなたはなんとなくおれの肩を指で押してみた。

おれからは何の反応もない。

何の反応もないが、あなたは「九折さんに触れた」「何か、すごく軽いのに、みつしりしていた」という体験をするだろう。

あなたはAくんの肩も指で押してみた。

Aくんからは、

「ん？ あはは、何？」

という強い反応が返ってきた。

けれどもあなたは、Aくんに触れたという体験はせず、ただ「うわっ」という心理的のけぞりだけを体験するだろう。あなたの指先には、「なんか

すっごく重くて、疲れているというか」「なんか、物体、みたいな感じがあって、すごくしんどそうな感じがした」という感触が残っている。

Aくんはアゴを脱毛しているので、アゴがつるつるだ。

いっぼうおれは、もはや不審者かよ、というほどの無精ひげを放置している。

そのときあなたは、Aくんのアゴを「グロい」と感じるのだ。

あなたがよっぽどスケベで、セックスフリートで、頭の中にそれしかなかったなら、つるつるのアゴに欲情するかもしれないが、そうでないかぎり、あなたはなぜか、脱毛されてスキンケアもされているAくんのアゴを

「グロい」と感じる。

なぜグロいのだろうか。

そもそもグロいというのはどういうことだろうか。

あまり専門的に説明すると長くなるので、はしるが、グロいというのは「壊れて稼働している生体」なのだ。

グロいからあまり詳しくは言いたくないな。

たとえば、心臓が稼働していることじたいはグロくないが、体内から取り出された心臓が単独で稼働しているのはグロい。

テーブルの上でむき出しの心臓がドクンドクン暴れていたならグロいだろう。

(やっぱりこの説明はやめよう)

Aくんは、自分の内容物が自分だと思っている。

「女性ってさ、けつきよく男よりは、繊細だから。肝腎なところでは、男が護ってやらなきゃいけないって、おれ思うんだよね」と、

Aくんは思っているし、あなたに向けてそう語っている。

彼は、そういう思いとか、考えとかの、内容物、あるいは放出物が、「自分」だと思っている。

「おれさ、子供のころに、兄と比べられて、悪く言われることがよくあって。それですっごい傷ついたんだよね、当時。だからおれって、差別を受ける人たちの苦しみが、よくわかるって思う。そういうのって、自分の中にずーっと残っていて、そんな簡単に消えてくれないんだよね」と

と言って、Aくんは暗い顔をする。

そうした、当時の流入物や、現在の放出物が、自分なのだとAくんは思っている。

そうしたいろんな思いがあるから、Aくんは一定の自信を持っているのだ。

内容物はバンバンだから。内容物自信。

Aくんは自分の中身を、自分でまともだと思っていて、だからこそ自信を持っている。

おれには中身なんかない。

おれはあなたに、  
「初対面というのは、礼儀を重んじるべきだが、それはさておき、缶コーヒ―買ってきてくれ」

と言うだろう。手元でたばこを巻きながら、

そうしたらあなたは、腰を浮かせて、

「えっと、ブラックですか。それとも、ミルクや砂糖入り……」  
と言うだろう。

「ブラックで」

「はい」

これに中身なんてあるの？

十五年、つぶやきの病の真相は。

自分というものを内容物だと思いこんだ。

内容物の充実、およびその強さとともさが、自分の充実であり、自分の強さとともさだと思い込んだ。

大量の内容物があり、それを菌床として、ニセ自信というキノコが生えてきてしまった。

Aくんの自信は、自信ではなくキノコなのだ。

それがグロい。

これが十五年つぶやきの病の真相だ。

いまさらこんなこと引き受けられない。

いまさら、この十五年、なにひとつ「自分」にはなっていなかったというようなことは、もう引き受けられない。

スッカスカという、そのスッカスカていどがシャレにならなすぎる。

十五年ってデカすぎるだろ。

もう、ニセキノコを自信にして生きているのだから、いまさらそれをなしにするなんてことは、たぶん現実的に出来ない。

Aくんはまともに誰かと、「自分」として話したことなんかない。

だけどトースキルには自信があるのだからグロいのだ。

Aくんの知り合いのBくんもグロいし、スケベダンスではしゃいでいる女子中学生も、直に接触すると残念ながらグロい。

グロいというのは、キツイのだが、誰にとってキツイかというと、本当は自分自身にとっていちばんキツイ。

自分は自分自身から離れられないのだから。

だから、AくんもBくんも、あるいは場合によっては踊っている女子中学生も、おれのことを攻撃する。

攻撃なんか、されていけないけれど、その攻撃はとつじよ始まるのだ。

とつじよ発生して、発生すると、それに取り憑かれて、彼らはその攻撃がやめられなくなる。

攻撃の動機は、自分自身のグロさだ。

自分自身のグロさというのは本当にキツく、本当に耐えづらい。

だから、自分自身のグロさというのは、大前提、「認められない」というのがほとんどなのだ。

公園にいたおれは帰宅し、あなたとAくんは公園でふたりきりになる。

そこにBくんも来た。

たまたま、TikTokの女子中学生も、近くに来て踊るのを撮影している。

そのときとつじよ、Aくんがあなたに向けて、

「あのさあ、ところでさあ、さっきのオッサンやばくね？ なんかいきなり、きみのことバシらせてたじゃん。何あれ。ひよっとしていまどき、先輩気取りみたいなやつ？ おれ見てて、マジでゾツとしたんだけど」

それに乗っかってBくんが、

「えっ、何それ、何それ。なんか聞くだけでキモいけど」  
と加勢してくる。

「なんかさあ、きつたないオッサンがさあ、自分は年長者ですみたいな感じで、老害ムーブがましてくんの」

こうして攻撃に転じると、人は、自分のことをグロいとは認識せずに済む。

この攻撃は、いったん始まってしまうと、不可逆のもので、もうやめられなくなるし、引き返すこともできなくなる。

引き返すということは、自分のことをグロいと感じたあの分岐点に引き

返すということだから、それはもう無理なのだ。

それぐらい、自分がグロいというのはキツい。

「マジありえんわあ。いきなり何かエラソーに、パシらされて、きみ、内心めっちゃキツかったっしょ。ごめんね、なんかとっぜんだったから、おれも止めらんなくて」

ここで注目しておいてほしいことがある。

このときAくんは、あなたの内心が、自分の内部に流入してきているのだ、というふうにまくし立てている。

仮に、パシらされたのがキツかったとして、それはあなたにとってのキツさだったはず。

Aくんにとってのキツさではないはずだ。

だがAくんはあなたの内容物を、勝手に推測して、勝手に彼自身の内部に流入させる。

これも、この十五年の真相のひとつだ。

Aくんは、内容物を自分だと思っているので、自分の内容物に、強さと正義が欲しいのだ。

この場合、パシらされたあなたがキツかったとしたら、被害者であるあなたは正義の側だし、その屈辱と無念の思ひは、こんなに強い正義の作用力を持っている。

Aくんは、あなたに正義をけしかけて、あなたからの流出物をすばやくみずからの内部に流入させ、自分の内容物に強力な正義の作用力を取り返もうとするのだ。

正義ネタは、おいしい、と単純に捉えてもいい。

Aくんはもちろん、あなたの傷ついた（かもしれない）ところを思いやったり、労わったりしているのではなく、ただこのときのあなたの内部を正義醸造所と見立て、そこからの正義の作用力を可能なかぎり自分の内部に輸入しようという目論見なのだ。

自分の内部を正義の作用力で満たせば、よもや自分がグロいかもなんてことは考えなくて済むようになる。

端的に言うと、現代は、そうして「グロさの押しつけあい」をしている

る。

十五年間で溜まりにたまった、世の中全体のグロさを、自分ではない他の誰かに押しつけて、自分だけは涼しい顔をして逃げ切ろうと思っているのだ。

自分でない他人がグロい目に遭えばいいと思っているだけだな。

他人をグロい目に遭わせているうちは、自分のグロさに向き合わなくて済む。

長くなった話もそろそろ終わりに向かっていこう。

人々は、「自分」を内容物と思い込むようになった。

内容物の充実が自分の充実だと思い込むようになった。

内容物を菌床にしてニセ自信というキノコが生えた。

内容物を放出し、他人の内部に流入させ、作用力を及ぼすのが、自分の強さであり、自分の活動であり、自分のコミュニケーションだと思い込むようになった。

本当は、いま人々はスッカスカだ。

内容物はパンパン、自分はスッカスカだ。

自信なんか持っているわけがない。

十五年ものあいだ、「自分」は何にも触れてこなかったのに、自信なんか持てるわけあるか。

まったく自信のない生体、スッカスカの生体が、煮えたぎる内容物の作用力で稼働している。

壊れて稼働している生体だからグロい。

グロいというのは本当にキツいことであって、向き合いづらく、しかも自分自身がグロいなどということには、人はとてもじゃないが向き合うことができない。

だからグロさを他人に押しつけようとしている。

他人にグロさを押しつけて、自分だけなんとか最後まで涼しい顔で逃げ切ろうと目論んでいる。

そんなことをもちろん、それぞれが自覚しているわけではない。

自覚も何も、彼らは自分を内容物だと思っているのだから、自覚なんて

持つわけがない。

どれだけ清らかな内容物を自家生産し、おしゃれで潔い内容物を外部から輸入しても、自分のグロさは変わらない。

内容物をどれだけ清潔さと正義のてんこもりにしたとしても、おれが言及しているのは内容物のことじゃないのだから見当はずれだ。

おれが言及しているのは内容物ではなくて「あなた」だ。

仮にあなたが聖書と仏典のすべてを暗記して口唱したとしても、それは聖書と仏典があなたの内容物になっただけでしかない。

あなたの記憶力に、聖書と仏典というコンテンツがあるだけだ。

それはあなたの同一性にかかわる書物になっているわけじゃない。

どうしたらいい、というような方法は存在しないけれど、ただ言えるのは、自分には中身なんてないということ。

あなたがいればよく、あなたの中身なんかなくていい。

あなたの世界と、あなた自身が、同一性に至っていれば、あなたの中身なんて、ありもしないものをあなたの内部に抱え込む必要はない。

おれには内部なんてないし、中身なんてないし、内容物なんてない。

ここまで読んでもおれの中身なんて一ミリも出てこなかっただろう。

書物でいいし、作品でいいのだ。

内容物、書物、と並べて書いてみる。

どちらも似たようなものじゃないか。

あなたは書物をあなたのコンテンツにしないといけないと思うのだろうか。

あなたはいま、おれを読んでいる。

おれの書物は、おれの同一性のものだ。

おれに中身がない以上、おれの書物にも中身がない。

中身がないものを、あなたはどう受け取っているのだろう。

この中身のない書物から、あなたはいったい何を受け取っているというのだろう。

あなたにとって書物の受け取り方なんてひとつしかない。

あなたの同一性にするしかないのだ。

あなたがこの書物を同一性にするとき、この書物は「あなた」だ。

おれが書いたので、この書物は「おれ」だ。

だから本当に起こるのは、あなたとおれの同一性だ、ということになる。

これは、この十五年間、まったくつぶやかずにきた、おれの側の真実

だ。おれに中身はなく、書物にも中身はない。あなたにも中身はない。書物が問われて、同一性はおれとあなたの同一性になる。

「十五年つぶやきの病の真相」

2025.02.01 九折空也